

## 大妻女子大学大学院 人間文化研究科の設置（改組）の趣旨等について

### 1. 設置（改組）の趣旨及び必要性

大妻女子大学は、明治41年大妻コタカが創設した私塾が成長発展し、昭和24年に設置されたものである。

大妻女子大学の変遷のうち、大学院に関する大きな変革としては、第一に、家政学部被服学科、食物学科及び児童学科を基礎とし、昭和47年に家政学研究科食物学専攻（修士課程）、昭和52年に児童学専攻（修士課程）、昭和55年に被服学専攻（修士課程）が開設され、さらに昭和57年には私学として初めて被服環境学専攻（博士後期課程）を開設した。

この博士後期課程被服環境学専攻は、既設の家政学研究科被服学専攻（修士課程）と人間生活科学研究所を基盤とし、これに児童学専攻（修士課程）の協力を得て設けられたもので、人間とその最も近い環境である被服との関わり合いを研究することを特色とした。

その後平成8年に被服環境学専攻（博士後期課程）に食物学、児童学分野を組み入れ、家政学に関する諸科学及び社会情勢の目覚ましい変化を反映させ、人間生活学専攻（博士後期課程）に名称変更及び改組を行った。

家政学研究科設置から現在までの37年間で、修士課程の修了者（修士（家政学））は283名、博士後期課程の学位授与者（甲：博士（学術））は14名、博士論文による学位授与者（乙：博士（学術））は35名に達している。

第二に、文学部国文学科（現在の日本文学科）及び英文学科を基礎として、昭和47年に文学研究科国文学専攻（修士課程）及び英文学専攻（修士課程）が開設され、その後進展変容し続ける文学研究の状況に対応し、国際的視野を持ち、流動する文学現象の本質を読み解ける伶俐な学究を養成し、学界に新風を送り込み、文学研究の推進に一層寄与することを目的とし、平成8年に国文学専攻（博士後期課程）及び英文学専攻（博士後期課程）を開設した。

文学研究科設置から現在までの37年間に、修士課程の修了者（修士（文学））は205名、博士後期課程の学位授与者（甲：博士（文学））は1名、博士論文による学位授与者（乙：博士（文学））は4名である。

第三に、社会情報学部社会情報学科を基礎として、社会そのものの高度な情報化にともなう新たな社会科学の領域における学問研究の必要性という社会的要請に応えるため、平成8年に社会情報研究科社会生活情報専攻（修士課程）を開設し、現在までの13年間に修士課程の修了者（修士（社会情報））は15名となった。

第四に、人間関係学部人間関係学科を基礎として、平成15年に人間関係学研究科社会学専攻（修士課程）及び臨床社会心理学専攻（修士課程）（平成17年に臨床心理学専攻に名称変更）を開設した。社会学専攻は、人間関係の学としての社会学を基礎に置き、新しい公共性をより専門的に、総合的に展望することを目的とした。臨床心理学専攻は、対人関係や集団、組織や地域社会における人間関係をめぐる諸問題を、社会心理学と臨床心理学の有機的結合を図る立場から、研究・調査し、さらに臨床実践を通してその解決へ向けての展望を開くことを目的とした。現在までの6年間に、修士課程の修了者は34名（修士（社会学）4名、修士（心理学）30名）となった。

以上のように本学大学院においては、既設の学部・学科を基盤とし、その上にそれぞれに対応する研究科・専攻を設置し、今日まで4研究科11専攻として時代の要請に即応した高度の水準にある研究者及び高度の専門的職業人の養成に貢献してきた。

また、基礎となる学部においても、平成11年に開設した人間関係学部人間福祉学科及び比較文化学部比較文化学科、平成14年に増設した家政学部ライフデザイン学科及び文学部コミュニケーション文化学科の大学院構想等、本学における学問体系の幅が広がってきた。

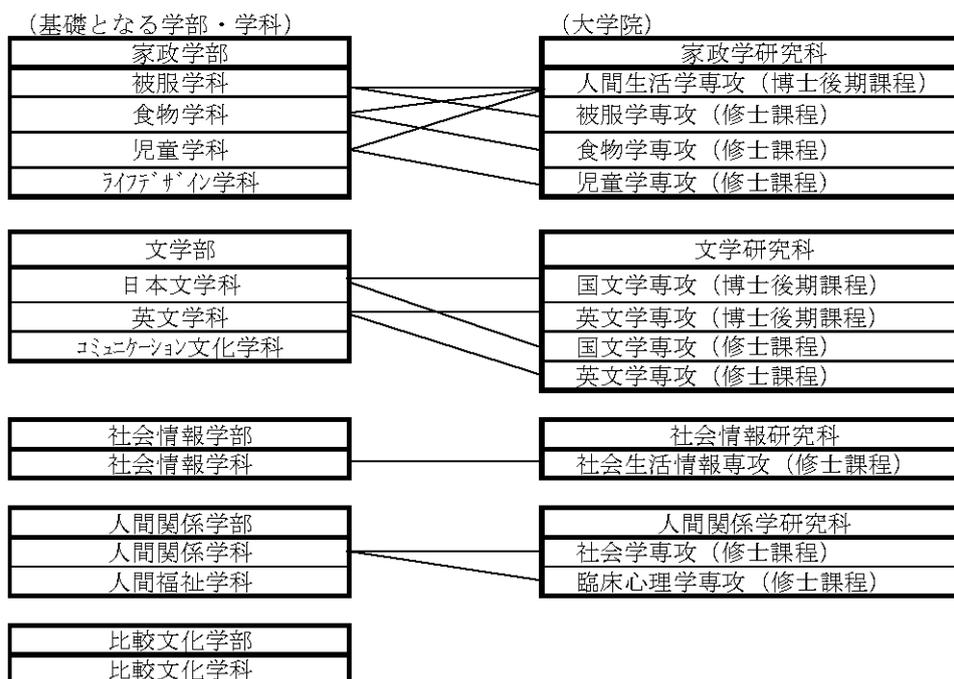
以上のように本学では、その知的活動によって社会の多様な要請や期待等に適切に対応してきたが現在の研究科の構成は、図1のとおり、既設学部・学科の上にそれぞれの研究科・専攻を独立して設置しているため、複雑化・高度化が進み、急激に変化している社会の課題に対応できるよう、研究科間を越えた学際的・総合的な教育・研究への新たな取り組みを開始することとした。

家政学部、文学部、社会情報学部、人間関係学部及び比較文化学部の5学部11学科を有する女子総合大学として、領域横断的な大学院への改組を目指し、図2及び図3のとおり、家政学研究科、文学研究科、社会情報研究科、人間関係学研究科の4研究科11専攻を、人間文化研究科の1研究科6専攻に統合・再

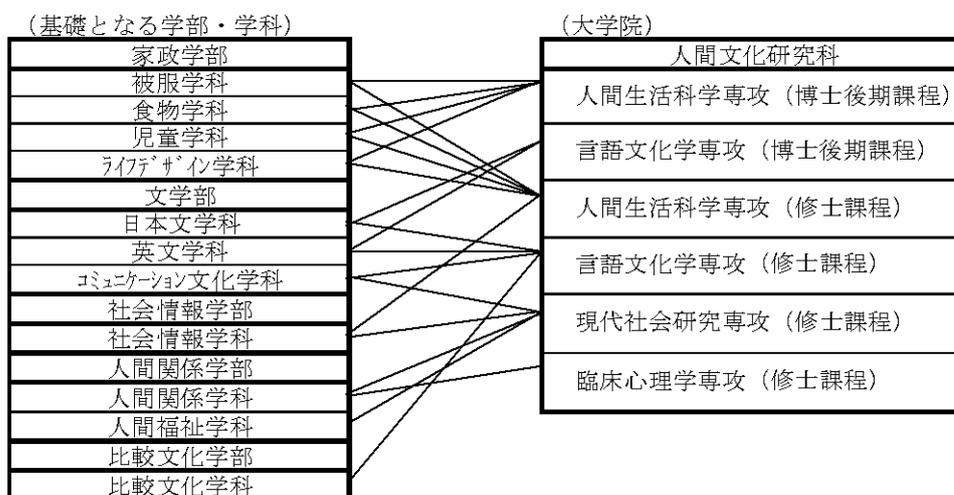
編成し、学術研究の著しい進展や社会・経済の変化に対応できる広く国際的な視野と総合的な判断力を備えた女性のリーダーの育成に努めるため、大妻女子大学の総力を結集して、大学院におけるさらなる教育・研究の推進に取り組むこととした。

人間文化研究科では、生活科学、人文学、社会学、人間学などの人間の文化全般に関して、広い視野と学際的・総合的視点に基づいた理論的・専門的・実践的な高度の教育と研究を行うことにより、社会関係資本の重要性が増す今後の社会をリードできる人材を養成することを目的とし、本学が有する知財力並びにこれまでの教育・研究の実績等を踏まえ、修士課程には、人間生活科学専攻（入学定員12名）、言語文化学専攻（入学定員8名）、現代社会研究専攻（入学定員6名）及び臨床心理学専攻（入学定員6名）の4専攻を、博士後期課程には、人間生活科学専攻（入学定員3名）、及び言語文化学専攻（入学定員3名）の2専攻を設置することとした。

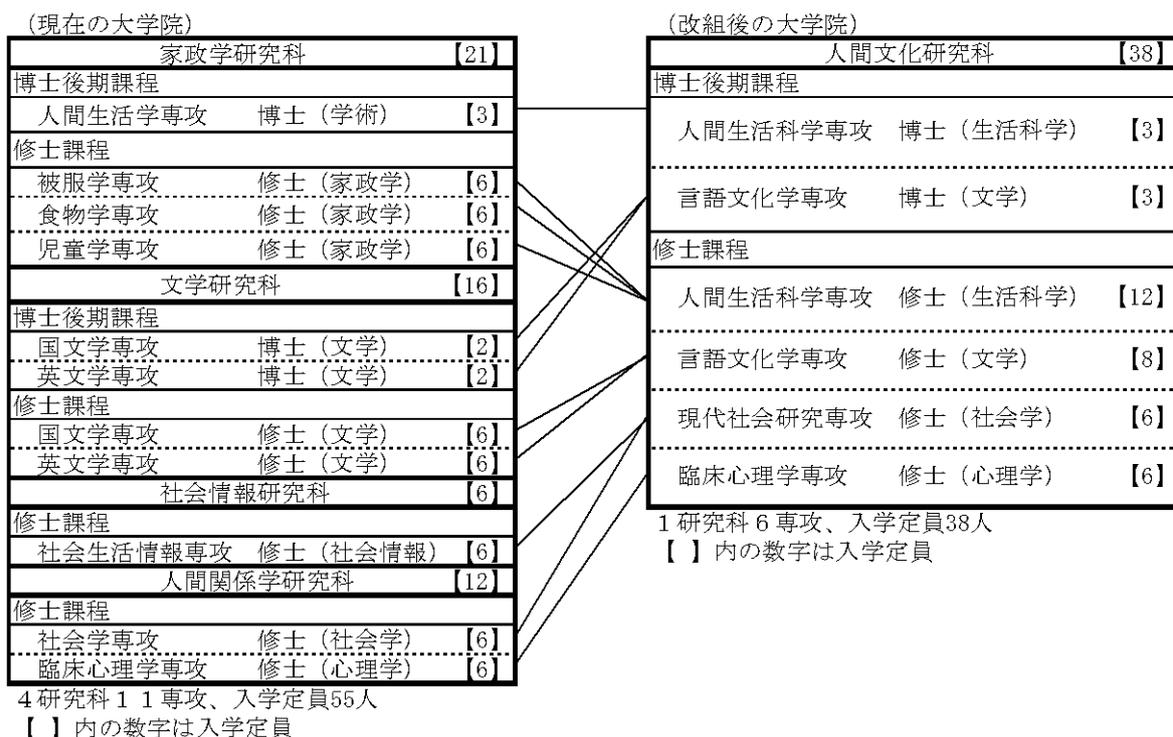
現在の大妻女子大学大学院の構成 【図1】



改組後の大妻女子大学大学院の構成 【図2】



改組後の大妻女子大学大学院の構成【図3】



## 2. 研究科、専攻の目的及び人材養成

### (1) 修士課程

修士課程は、学部における一般的並びに専門的な教養の基礎の上に、広い視野に立って、精深な学識を授け、専攻分野における研究能力またはこれに加えて高度の専門性が求められる職業を担うための卓越した能力を培うことを目的としている。この目的を踏まえ、以下のように各専攻の目的等を定めている。

#### ① 人間生活科学専攻

人間生活科学専攻(修士課程)では、被服、食物、保育、家庭生活などの研究の枠を超え、人間生活を人間、発達、心理、社会、環境、生態、健康、教育、文化などと関連させながら、生活を総合的の科学として捉えると同時に、生活の知を探究することができる人材を養成することを目的とする。

具体的には、柱となる学問分野として、「健康・栄養科学専攻」、「生活環境学専攻」、「児童発達臨床学専攻」の3領域を設定し、「健康・栄養科学専攻」では、近年のわが国の急速な高齢社会への移行、生活習慣病の広がり、医療費の増加、食育の必要性など、これらの社会的な課題に対応しうる高度の専門的職業人、すなわち、医療、福祉、公衆衛生、初等・中等教育における食育を担う専門家、それらに必要な食品や医療用品の技術開発を行う専門家、それらに関連した研究者の育成。「生活環境学専攻」では、衣環境、住環境、生活環境、地域環境、地球環境を含め、それらのサイエンス、マネジメント、デザインの研究・教育を行い現代社会における専門知識の高度化に対応できる人材の育成。「児童発達臨床学専攻」では、子どもをはじめ人生の各周期段階(子どもや青年、及び中・高齢者)における発達臨床上の諸課題について、その本質や背景要因の解明に積極的に取り組みながら、理論的・実践的な問題解決能力を身に付けると同時に、保育・教育・臨床などの分野において高い見識を身に付けた人材、及び後継者(保育・教育・臨床などに関する高度な専門的職業人)の養成を目指している。

なお、人間生活科学専攻修了者は、生活科学に関する基礎的な能力に加えて高度な職業能力を要される分野での活躍が期待されているが、過去3年間の修士課程修了者の就職実績から見ると、修了者の53.4%が大学・研究機関の研究者・職員として、20.0%が小中高等学校の教員として、13.3%が企業等の商品開発に、13.3%が栄養士として活躍している。したがって今後ともにこのような分野での活躍が期待できる。

#### ② 言語文化学専攻

言語文化学専攻（修士課程）では、日本と英米の文学と言語を中心とした専門領域の研究と教育及び専門的な知識に裏打ちされた高い知性と豊かな情操を備えた人材の養成を基盤として、さらに、近年内外で展開する政治、経済、文化の流動化に応え、洋の東西にまたがる国際情勢と文化の動態を柔軟に取り込む知の枠組を確立し、実践するとともに、この理念に根ざした高度の専門的職業人を育成して、社会の要請に応え、文化に貢献することを目的とする。

具体的には、専攻の柱として、「日本文学専修」、「英語文学・英語教育専修」、「国際文化専修」の3分野を設け、「日本文学専修」では、日本の文学と文化に対する研究と教育を一層推進して研究者を養成するとともに、人文学の深い専門的知識や教養、あるいは感性に基礎を置き、中等教育以上の教員や、社会教育や行政、メディアなどの領域に関連する文化的社会的諸分野で活躍できる有為な人材を養成する。「英語文学・英語教育専修」では、文学と言語を通じた英語文化の研究と教育を一層推進して研究者を養成するとともに、後期中等教育における実質的な義務教育化と小学校における英語教育の施行に対応して、堅固な専門的知識と技量、文化的社会的な関連知識を備えた英語教員、また、高度の英語運用能力と英語文化の知識をもとにした異文化への対応能力を持ち、社会教育や国際化した諸分野で活躍できる人材を養成する。「国際文化専修」では、多文化の流動的な実態を対象とする理論的研究と実践的教育を推進して、研究者を養成するとともに、生成する多文化の理論的知識をふまえた情報処理能力と、欧米諸語だけでなく中国語や韓国語、ロシア語などの広範な言語能力を駆使して、グローバルな文化・社会の交流とその形成に参画できる人材を養成する。

なお、前身となる文学研究科修士課程国文学専攻及び英文学専攻は、平成15年度から19年度までの5年間に、修了者の中に博士後期課程への進学者、それぞれ6名、1名の計7名に加え、中等教育機関の講師をそれぞれ1名、3名の計4名、また、国文学専攻からは大学職員1名、民間企業社員2名を輩出してきた。言語文化学専攻3分野修了者も、社会の一層の高学歴化とグローバリズムの全面的な展開の中で、文学と言語を中心とした専門的な素養、言語文化や言語教育に対する先進的な知見と技量、国際的視野に立つ多文化理解力などを備えた人材を求めるニーズの昂まりに応えたと期待できる。

### ③現代社会研究専攻

現代社会研究専攻（修士課程）では、現代の多様化する高度情報社会が要請する主要な専門的学問領域と、より高度な専門的職業領域との連携を図り、市民としての主体性とコミュニケーション能力ないしは臨床能力を備えた専門的職業人として、現代社会に実質的に貢献できる人材を養成する。

具体的には、柱となる学問分野として、「情報コミュニケーション専修」と「臨床社会学専修」の2領域を設ける。「情報コミュニケーション専修」では、さまざまな「情報」の収集・検索・分析・加工・統合など、IT化が進むなかで重視されている基本情報技術者資格、2009年度より新発足したITパスポート資格などに裏打ちされた情報処理のエキスパート、ならびに、教科「情報」の教職資格のステップアップを目指す社会人の養成を目指している。「臨床社会学専修」では、生と死ならびにジェンダーに関わる問題をより臨床的な観点から捉え、教員・臨床心理士・看護師・社会福祉士・介護福祉士・医師および研究者らが現代に必要な社会的サポートの能力の研鑽を目指し、実践能力を有する臨床・教育等の専門家の養成を目的とする。

なお、前身となる社会情報研究科ならびに人間関係研究科社会学専攻では、その設置以来、高度な技術・技能とともにそれを支える社会科学の専門知識の習得に力点を置き、一般事務職・システムエンジニア・「情報」の教員（私立高）などを送り出してきたが、現代社会研究専攻修了者も、高度な技術・技能と社会・人間へのより深い理解の両面を兼ね備えた人材養成を目指している。すなわち、「情報コミュニケーション専修」では、コンピュータリテラシーとそれを支える社会的・人間的知識基盤の両面を兼ね備えた人材、ならびに、「臨床社会学専修」では、今日、頻繁に発生しているドメスティックバイオレンスやターミナルケアの実践に必要な2つの側面、すなわち、臨床レベルでの人的援助のスキルとそれを支える社会的・人間的知識基盤の両面を兼ね備えた人材の養成を目指している。

これらの人材養成は、現代社会の課題ないしは現代社会からの要請でもあると考えられるため、「情報コミュニケーション専修」では、高度情報社会に対する理解と分析力を有した専門的な情報技術者として、他方、「臨床社会学専修」では、福祉や医療や教育等を総合的に見通すことのできる実践能力を習得し、それぞれの現場においては、これらの能力を発揮してより人間的な活躍が期待できる。

### ④臨床心理学専攻

臨床心理学専攻（修士課程）では、臨床心理学を中心に、発達心理学、社会心理学などの関連心理学諸領域及び精神医学などの学問分野を基礎に置き、臨床心理学的なアセスメント、心理面接、地域援助

の理論と技法を修得し、さらに科学的思考と臨床的な態度とを身につけ、医療・教育・産業・福祉・司法などのさまざまな領域で、適切な援助、介入及び研究のできる臨床心理の専門家を養成することを目的とする。特に、臨床心理学専攻は、財団法人日本臨床心理士資格認定協会が認可する第1種指定大学院として臨床心理士を養成し、引き続き第1種指定大学院の認可を受ける予定である。

なお、前身となる人間関係学研究科臨床心理学専攻修了者20名が、臨床心理士の資格を取得し、総合病院及び精神病院の常勤心理士、公立教育相談室・青少年相談センターなどの相談員、スクールカウンセラー、大学学生相談室カウンセラー、企業における復職支援スタッフ等として活躍している。今後、犯罪被害者支援、子育て支援、高齢者支援をはじめ、発達障害児支援、児童自立支援などさまざまな領域で、臨床心理士の社会的要請が増大することが予想され一層の活躍が期待できる。

## (2) 博士後期課程

博士後期課程は、専攻分野について研究者として自立して研究活動を行い、またはその他の高度に専門的な業務に従事するために必要な高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養うことを目的としている。この目的を踏まえ、以下のように各専攻の目的等を定めている。

### ① 人間生活科学専攻（博士後期課程）

人間生活科学専攻（博士後期課程）では、主要研究分野として「生活人間学専修」、「臨床人間学専修」、「生活計画学専修」、「生活素材学専修」の4領域を設定し、生活の主体である人間と生活科学に関する諸側面について、その生態、行動と発達過程、生活の素材、生活の管理を対象として、研究・教育を行い、人間生活科学を専攻する大学院生が当該専攻分野に関する学識を深め、将来において研究者として自立して研究活動を行い、高度に専門的な知識と技術を必要とする業務に従事しうる創造的な研究開発能力を涵養する。またあわせて、特に女性の立場から広く人間の生活現象に関わる諸問題を真摯に探求し、解決することができる有為の人材を養成し、もってわが国の生活諸科学分野における学術の発展に寄与することを目的とする。

なお、前身となる家政学研究科博士後期課程人間生活学専攻修了者（単位取得満期退学者を含む）の75.9%（博士号取得者の78.3%）が大学などの教授、准教授、講師などに就き、企業における研究所などが13.8%（博士号取得者の8.7%）、大学などの非常勤の勤務が10.3%（博士号取得者の13.0%）となっており、かなり良好な就職状況である。また、これらの修了者の殆どが生活科学関係の研究教育機関に就職していることから、本課程はわが国生活科学の研究教育のひとつの礎として大きな役割を果たしてきたといえる。したがって今後も本課程修了者が従来同様に活躍することが期待できる。

### ② 言語文化学専攻

言語文化学専攻（博士後期課程）では、前身となる文学研究科（博士後期課程）が推進してきた専攻分野を継承するとともに言語文化学専攻（修士課程）の日本文学専修及び英語文学・英語教育専修における領域の教育・研究をさらに深化発展させる。すなわち専門的な業務に従事するために必要な高度の研究能力、及びその基礎となる領域横断的な豊かな学識の養成を基盤として、内外で加速度的に流動化する社会・文化の動態を読み解き、多様化し先鋭化する研究分野の動向や理論の展開に柔軟かつ強靱に適応して、研究成果を挙げることができる自立した研究者養成のための研究・教育を行う。具体的には、主要研究分野として「日本文学専修」及び「英語文学・英語教育専修」の2領域を設定し、「日本文学専修」では、日本古典文学と日本近代現代文学についての専門教育を行い、文学作品に対する高度な読解・解釈に基づき、日本文学の生成と発展を研究するとともに、学際的知識の拡充にもつとめ、新たな研究状況に適応できる研究者を養成する。「英語文学・英語教育専修」では、英米を中心とする英語文学、英語学、英語教育についての高度な専門教育を行い、最新の多様な文学理論、言語理論、言語習得・教育理論を踏まえ、独創的な研究を推進することによって学問文化の向上発展に寄与する研究者を育成する。

なお、前身となる文学研究科博士後期課程国文学専攻及び英文学専攻修了者（単位取得満期退学者を含む）には、平成15年度から19年度までの5年間で大学非常勤講師をそれぞれ3名、計6名を教え、修得した専門的知識をふまえて活躍している。言語文化学専攻博士後期課程の日本文学専修、英語文学・英語教育専修においても、大学等の教育・研究機関における教育・研究者として貢献でき、また、高学歴化が進む社会のニーズに応え、高度な学際的知識をふまえて、出版関係の企業、大学・研究所等の図書館などで活躍することが期待できる。

### 3. 研究科、専攻の名称及び学位の名称

人間文化研究科は、既設の家政学研究科、文学研究科、社会情報研究科、人間関係学研究科を統合・再編成し、生活科学、人文学、社会学、人間学などの人間の文化全般に関して、広い視野と学際的・総合的視点に基づいた理論的・専門的・実践的な高度の教育と研究を行うことにより、社会関係資本の重要性が増す今後の社会をリードできる人材を養成することを目的としているため、研究科の名称を人間文化研究科【Graduate School of Studies in Human Cultures】とした。

#### (1) 修士課程

##### ①人間生活科学専攻【Master's Program for Studies in Human Life Sciences】

人間生活科学専攻（修士課程）は、前身となる家政学研究科被服学専攻、食物学専攻、児童学専攻（修士課程）が対象としてきた被服、食物、保育、家庭生活などの研究の枠を超え、人間生活を人間、発達、心理、社会、環境、生態、健康、教育、心理、文化などと関連させながら、生活を総合的・科学的として捉えると同時に、生活の知の探求を目的としているため、その専攻名を人間生活科学専攻とし、授与する学位を従来の修士（家政学）から、修士（生活科学）とした。

##### ②言語文化学専攻【Master's Program for Studies in Language and Culture】

言語文化学専攻（修士課程）は、前身となる文学研究科国文学専攻（修士課程）及び英文学専攻（修士課程）が推進してきた日本と英米の文学と言語を中心とした専門領域の研究と教育及び専門的な知識に裏打ちされた高い知性と豊かな情操を備えた人材の養成とを基盤として、さらに近年内外で展開する政治、経済、文化の流動化に応え、国際情勢と文化の動態を柔軟に取り込む知の枠組みを確立し、実践するとともに、この理念に根ざした高度の専門的職業人を育成して、社会の要請に応え、文化に貢献することを目的としたため、その専攻名を言語文化学専攻とし、授与する学位は従来同様、修士（文学）とした。

##### ③現代社会研究専攻【Master's Program for Studies in Contemporary Society】

現代社会研究専攻（修士課程）は、現代の最も代表的な2つの研究課題領域、すなわち、一つは、現代社会の構造的基盤を成す情報コミュニケーションに関する領域と、もう一方は、人間の生と死・ジェンダーに関する社会問題について臨床研究を行う領域、この2つの今日的な研究課題領域としている。

また、本専攻の前身は、社会情報研究科社会生活情報専攻（修士課程）と、人間関係学研究科社会学専攻（修士課程）であり、この2つを統合することによって、より広義の社会的な観点から、高度情報社会が要請する専門的学問領域と専門的職業領域との連携を図る。この学問と職業の連携により、本専攻は、市民としての主体性とコミュニケーション能力ないしは臨床能力を備えて、現代社会に実質的に貢献できる人材養成を目標としている。ここにいう「高度情報社会が要請する専門的学問領域」とは、一つは、情報コミュニケーションに関わる諸問題の理論的かつ実証的な知の体系を再構築しようとする領域であり、もう一つは、これまでとは価値観が大きく変化している現代社会にあって、より学際的視点にたった社会的サポートを必要とする生と死・ジェンダーに関わる諸問題の臨床的な探求を目指す領域である。そこで、本専攻では、前者の領域を軸として「情報コミュニケーション専修」、後者の領域を軸として「臨床社会学専修」を置き、この2つの専修を、現代社会の「より高度な専門的職業領域」として位置付けているため、その専攻名を現代社会研究専攻とし、授与する学位は、従来の修士（社会情報）、修士（社会学）を統合し、修士（社会学）とした。

##### ④臨床心理学専攻【Master's Program for Studies in Clinical Psychology】

臨床心理学専攻（修士課程）は、前身となる人間関係学研究科臨床心理学専攻（修士課程）と同様のカリキュラムにおいて、臨床心理士の専門家の養成を目的としているため、その専攻名及び授与する学位は、前専攻名と同様、臨床心理学専攻とし、授与する学位も同様に修士（心理学）とした。

#### (2) 博士後期課程

##### ①人間生活科学専攻【Doctoral Program for Studies in Human Life Sciences】

人間生活科学専攻（博士後期課程）は、人間生活科学専攻（修士課程）における健康・栄養科学専修、生活環境学専修、児童発達臨床学専修において既に習得した知識、技術をさらに深化発展させ、生活人間学、臨床人間学、生活計画学、生活素材学の各領域が取り扱ってきた生活の構成因子としての人間、被服、食物、環境の各研究領域を横断して現代社会が抱える生活諸科学分野にかかわる複雑な問題をより複合的、学際的に把握し、これを探求し、解明することを目的としているため、その専攻名を人間生活科学専攻とし、授与する学位を従来の博士（学術）から、博士（生活科学）とした。

②言語文化学専攻 【Doctoral Program for Studies in Language and Culture】

言語文化学専攻（博士後期課程）は、言語文化学専攻（修士課程）における日本文学専修、英語文学・英語教育専修において習得した知識、技術をさらに深化発展させ、日本古典文学と日本近代現代文学についての専門教育、英米を中心とする英語文学、英語学、英語教育についての高度な専門教育を行うことを目的としているため、その専攻名を言語文化学専攻とし、授与する学位は従来同様、博士（文学）とした。

4. 教育課程の編成の考え方及び特色

人間文化研究科は、上述のように修士課程として人間生活科学専攻、言語文化学専攻、現代社会研究専攻及び臨床心理学専攻の4専攻を、博士後期課程として人間生活科学専攻及び言語文化学専攻の2専攻を設置するが、それぞれの教育課程の編成の考え方及び特色は以下のとおりである。

なお、修士課程各専攻及び博士後期課程各専攻のカリキュラム構成は、図4及び図5のとおりである。

修士課程各専攻のカリキュラム構成【図4】

区分	人間生活科学専攻	言語文化学専攻	現代社会研究専攻	臨床心理学専攻
研究指導 (必修)	人間生活科学特別研究 (10単位)	言語文化学特別研究 (8単位)	現代社会研究特別演習 (4単位) 現代社会研究特別研究 (8単位)	臨床心理学特別研究 (4単位)
専修 ・ 分野 (選択)	健康・栄養科学専修 栄養化学分野 食品・機能学分野 調理科学・食嗜好学分野 医療・保健栄養学分野	日本文学専修 古典文学分野 近代現代文学分野 日本語学分野 関連分野	情報コミュニケーション専修 基礎理論分野 社会・経済と情報分野	臨床心理学基礎分野 (必修18単位)
	生活環境学専修 環境デザイン分野 環境マネジメント分野 生活環境デザイン分野	英語文学・英語教育専修 英語文学分野 英語教育分野 英語学分野	臨床社会学専修 生と死の臨床分野 ジェンダー-臨床分野 現代社会理論・社会調査分野	臨床心理学専門分野
	児童発達臨床学専修 基礎教育分野 保育・教育分野 心理・社会・文化分野 高度な専門性を旨とする分野	国際文化専修 地域文化分野 国際分野 関連分野		
共通科目	共通科目（選択）	共通科目（選択）		
基礎科目	基礎科目（選択）			

博士後期課程各専攻のカリキュラム構成【図5】

区分	人間生活科学専攻	言語文化学専攻
領域	生活人間学専修 臨床人間学専修 生活計画学専修 生活素材学専修	日本文学専修 古典文学分野 近代現代文学分野 英語文学・英語教育専修 英語文学分野 英語教育分野 英語学分野

(1) 修士課程

修士課程は、学部における一般的並びに専門的な教養の基礎の上に、広い視野に立って、精深な学識を授け、専攻分野における研究能力またはこれに加えて高度の専門性が求められる職業を担うための卓越した能力を培うことを目的としている。この目的を踏まえ、以下のように各専攻の教育課程を編成している。

## ①人間生活科学専攻

人間生活科学専攻（修士課程）は、前身となる家政学研究科被服学専攻、食物学専攻、児童学専攻の各修士課程が対象としてきた被服、食物、保育、家庭生活などの研究の枠を超え、人間生活を人間、発達、心理、社会、環境、生態、健康、教育、文化などと関連させながら、生活を総合的科学的として捉えると同時に、生活の知を探究することができる人材を養成することを目的とする。

この目的を達成するため、柱となる3領域として、「健康・栄養科学専修」、「生活環境学専修」及び「児童発達臨床学専修」の3専修を設定する。

健康・栄養科学専修では、近年のわが国の急速な高齢社会への移行、生活習慣病の広がり、医療費の増加、食育の必要性などが社会的な課題となっていることを基礎として、習得内容を構築した。すなわちこれらの社会的な課題に対応しうる高度の専門的職業人を養成することが必要であると考え、本専修では医療、福祉、公衆衛生、初等・中等教育における食育を担う専門家養成、それらに必要な食品や医療用品の技術開発を行う専門家、それらに関連した研究者養成を目指している。

生活環境学専修では、衣環境、住環境、生活環境、地域環境、地球環境を含め、それらのサイエンス、マネジメント、デザインの研究・教育を行い現代社会における専門知識の高度化に対応できる人材の養成を目指している。

児童発達臨床学専修では、子どもをはじめ人生の各周期段階（子どもや青年及び中・高齢者）における発達臨床上の諸課題について、その本質や背景要因の解明に積極的に取り組みながら、理論的・実践的な問題解決能力を身に付けると同時に、保育・教育・臨床などの分野において高い見識を身に付けた人材、及び後継者（保育・教育・臨床などに関する高度な専門職業人や研究者）の養成を目指している。

このような教育・研究を推進するため、以上の3専修の区分とともに、基礎科目、共通科目及び研究指導の区分を設け、以下のような教育課程を編成している。

基礎科目では、研究と教育の基礎を固めるため、使用言語を英語のみで行い、クリティカル・シンキングとして「Developing Critical Thinking Skills」及び「Critical Reading and Writing」の2科目を開講し、学生の基礎的知識力・能力等に応じて履修させる。

共通科目では、専攻に直結する領域の出身者と他領域出身者の双方に人間生活に係わる基本的な教育を行う「家族関係論」「ヒトと環境」「健康科学」「環境成長学」「生活情報論」「統計的調査方法論」「研究方法論Ⅰ（事例研究）」「研究方法論Ⅱ（フィールド研究）」「生涯学習の教育方法論」の9科目を選択科目として開講し、領域横断的に関心を広げるように促す。

健康・栄養科学専修では、上記の目的を達成するため、さらに「栄養化学分野」、「食品・機能学分野」、「調理科学・食嗜好学分野」及び「医療・保健栄養学分野」の4分野を設定し、「栄養化学分野」では、専門家としての基礎的知識や技術習得を目的として、「栄養生化学特論」、「分子細胞学」の2科目の講義に加えて、オムニバスによる基礎分野の実験技術習得を目的とする「栄養生化学・細胞学実験」で構成した。「食品・機能学分野」では、食品や医療技術に必要な機能性成分に関する近年のめざましい進歩に合わせた授業とそれらの安全性を考えた授業で構成した。「食品機能学特論」、「材料機能学特論」、「食生活安全学」、「食品微生物学特論」の講義科目とともに、技術習得を目的とする「食品・機能学領域実験」を開講する。「調理科学・食嗜好学分野」では、調理の基本技術・原理の理解を通して、調理、給食作業などの活動の基礎となる知識・技術を習得し、調理の嗜好性を高めることに応用できる能力を育成する。「調理科学特論」、「食嗜好学特論」の講義とともに演習によって、実習・実験に関わる技術の習得の方法を理解する。「医療・保健栄養学分野」では、近年の日本社会における高齢者問題、疾病の一次予防における食と身体運動、健康政策に必要な基礎理論の習得を目指す。「病態・高齢者代謝学」、「栄養疫学特論」、「公衆衛生学特論」の講義と「栄養疫学特論演習」を開講する。

生活環境学専修では、上記の目的に対応するため、さらに「環境サイエンス分野」、「環境マネジメント分野」及び「生活環境デザイン分野」の3分野を設定し、「環境サイエンス分野」では、飲み水やゴミなど身近な環境問題から、大気環境や長期環境変動などのグローバルな環境問題を科学的視点から考究し、それらの解決を図るため、生命環境、生活環境、環境衛生及び地球環境に関する講義5科目、演習4科目を開講する。「環境マネジメント分野」では、環境問題について人間教育を含めた社会科学的視点から考究し、持続可能な人類社会を創造することを目的として、環境教育、環境アセスメント、環境政策及び自然体験に関する講義6科目、演習3科目を開講する。「生活環境デザイン分野」では、身近な衣環境から住環境、都市環境、地域環境を含め、環境共生型の豊かな生活環境をデザインするため、衣生活材料、

生活環境機能、被服管理、住居学、住環境及び生活デザインに関する講義8科目、演習6科目を開講する。

児童発達臨床学専修では、上記の目的を達成するため、さらに「基礎教育分野」、「保育・教育分野」、「心理・社会・文化分野」及び「高度な専門性を目指す分野」の4分野を設定し、「基礎教育分野」では、保育・教育・臨床上の多様な要求に対応するため、発達及び臨床に関する講義4科目を開講する。「保育・教育分野」では、保育・教育・臨床に関する理論的、実践的な能力を身につけた人材を養成するため、保育・教育に関する講義9科目、演習4科目を開講する。「心理・社会・文化分野」では、心理・社会及び文化の分野について「子どもを原点」とした実践と新たな理論構築に向けた研究法を身につけさせるため、心理・社会・文化分野に関する講義3科目、演習4科目を開講する。「高度な専門性を目指す分野」では、本専修で学ぶ学生が保育・教育・臨床の分野で、さらに高度な専門的知識・技術の習得を目指すため、講義科目「インディペンデントスタディ」を開講し、保育・教育・臨床及び子育てに従事する者としての専門的知識(理論)と技術、実践力の向上に役立たせる。

研究指導としての「人間生活学特別研究」は、すべての学生が必修となるが、この科目では、指導教員が学生に対し、研究計画の策定を支援し、修士論文の作成に向け指導を行うことになる。

以上のように、人間生活科学専攻では、人間生活に係わるさまざまな分野に関する科目を、講義科目、演習科目、実験科目として開講し、学生の教育・研究に関する多種多様な要求に対応できるよう教育課程を編成している。

## ②言語文化学専攻

言語文化学専攻(修士課程)は、前身となる文学研究科国文学専攻(修士課程)及び英文学専攻(修士課程)が推進してきた日本と英米の文学と言語を中心とした専門領域の研究と教育及び専門的知識に裏打ちされた高い知性と豊かな情操を備えた人材の養成とを基盤として、さらに近年内外で展開する政治、経済、文化の流動化に応え、洋の東西にまたがる国際情勢と文化の動態を柔軟に取り込む知の枠組みを確立し、実践するとともに、この理念に根ざした高度の専門的職業人を育成して、社会の要請に応え、文化に貢献することを目的としている。

この目的達成のため、具体的には、柱となる3領域として、「日本文学専修」、「英語文学・英語教育専修」及び「国際文化専修」の3専修を設定する。

日本文学専修では、日本の文学と文化に対する研究と教育を一層推進して研究者を養成するとともに、人文学の深い専門的知識や教養、あるいは感性に基礎を置く、中等教育以上の教員や、領域に関連する文化的社会的諸分野で活躍できる有為の人材の養成を目指す。

英語文学・英語教育専修では、文学と言語を通じた英語文化の研究と教育を一層推進して研究者を養成するとともに、後期中等教育における実質的な義務教育化と小学校における英語教育の施行に対応して、堅固な専門的知識と技量、文化的社会的な関連知識をそなえた英語科教育の教員養成を目指す。また、高度の英語運用能力と英語文化の知識をもとにした異文化への対応能力とを併せ持ち、社会教育の場や国際化した諸分野で活躍できる人材の養成も目指す。

国際文化専修では、進展する国際化の中で多文化を対象とする研究と教育を推進して研究者を養成するとともに、理論に裏付けられた専門的知識や情報処理能力を備え、流動的な文化・社会における交流とその形成に参画できる人材の養成を目指す。

このような教育を推進するため、以上の3専修の区分とともに、基礎科目、共通科目及び研究指導の区分を設け、以下のような教育課程を編成している。

基礎科目では、研究と教育の基礎を固めるため、クリティカル・シンキングとして開講し、使用言語を英語に限る「Developing Critical Thinking Skills」並びに「Critical Reading and Writing」の2科目及び領域の出身者と他領域出身者の双方を対象として専攻に直結する基礎的な教育を行う「日本文学基礎演習」、「Fundamentals of Reading I・II」、「Academic Writing I・II」、「Professional English」の6科目を演習として、「日本文学研究方法論」、「国際文化研究法」の2科目を講義として開講し、学生の関心と達成度等に応じて履修させる。

共通科目としては、言語文化の基盤を確認する「草稿・テキスト学」、言語文化形成にかかわる「文学と教育」、「児童文学論」、領域横断的な関心を広げるよう促す「翻訳技術論」、「比較文学」を講義科目として開講する。

日本文学専修では、日本の歴史と文化に根ざした日本文学と日本語学の全領域にわたる授業科目を、「古典文学分野」、「近代現代文学分野」、「日本語学分野」及び「関連分野」の4分野において開講する。「古

典文学分野」では、古代から近世に至る日本古典文学史の総体を区分し、各時代における文学を扱う講義6科目と演習6科目を開講し、「近代現代文学分野」では、現在と身近な時代の文学を扱う講義4科目と演習2科目を開講して、歴史的知識や教養を深めるとともに、現代的諸問題とつながる文学の意義に対する理解を図る。「日本語学分野」では、日本語学の諸問題にかかわる講義2科目と演習2科目を開講し、語学や言語に対する知識の涵養を図る。また「関連分野」として、日本史学や日本文化史とかかわりをもたせる「語学文学特論」、日本文化形成の重要な契機であった中国文学を扱う「中国文学特論」の4科目をそれぞれ講義として開講する。

英語文学・英語教育専修では、「英語文学分野」、「英語教育分野」及び「英語学分野」の3分野を設定している。「英語文学分野」では、外国文学の研究と教育が要請する理念を再確認するために「文学と理論」、「文学と制度」、「文学と自然」の講義3科目、各ジャンルに対応する「英米詩」、「英米小説」、「英米演劇」、「英米散文」の演習6科目を開講する。これらの科目は文化との関連を見据えて構築され、英語教育分野を中心に学ぶ学生には、英語の技能向上だけでなく、教科に関わる文化的な知識と意識を高める場ともなる。「英語教育分野」では、原理を確認する「英語教授法研究」、実践の中に理論を求める「英語教育リサーチ方法」、四技能を対象とする「スピーキング・ライティング指導演習」、「リーディング・リスニング指導演習」、そして言語修得の原点解明に絶好な場である児童の外国語学習に関連した4科目を演習または講義として開講する。「英語学分野」は、言語学及び語用論の視点から英語という言語の構造と機能を探る諸科目、さらに、新しいデータ解析をとりこむ「コーパス言語学」、「テキスト言語学」を含む全8科目（講義4科目と演習4科目）を開講する。

国際文化専修では、「地域文化分野」、「国際分野」及び「関連分野」の3分野を設定している。「地域文化分野」では、グローバル的位相の理解に中心をおき、各地域の実態に関する調査研究を進める視点に立つ、「アジア文化演習」、「太平洋文化演習」、「ヨーロッパ文化演習」、「アメリカ文化演習」の演習16科目を開講する。「国際分野」では、グローバル化社会における国家・地域間の相互関係のシステムを考究する「国際交渉論」、「国際教育論」、「国際関係論」、「国際交流論」の講義4科目と地域間の対比的な視点を涵養する「比較社会論」、「比較思想論」、「比較文化論」の講義3科目を開講する。また、「関連分野」では、多文化共生社会の諸相を分析・検討する「民族共生論」、「言語文化論」、「表象文化論」の講義3科目を開講する。

研究指導としての「言語文化学特別研究」はすべての学生が必修となるが、この科目では、指導教員が学生に対し、研究計画の策定を支援し、修士論文の作成に向け指導を行うことになる。

以上のように言語文化学専攻は、内外の流動的な言語文化に関する研究能力を養うと同時に、高度かつ柔軟な専門的知識とそれに裏打ちされた豊かな情操とを備え、国際化社会において行動できる人材を養成することを目的とする。そして、その目的を達成するために、基礎科目、共通科目、3専修の専門科目及び研究指導をとおして、学生の希望を尊重した授業科目の履修を支援しつつ先進的な関心を育み、研究課題の方向付けを促すことによって、研究目標達成のため、きめ細かに指導する教育課程を編成している。

### ③現代社会研究専攻

現代社会研究専攻（修士課程）では、前身の社会情報研究科社会生活情報専攻（修士課程）と、人間関係学研究科社会学専攻（修士課程）を統合することによって、より広義の社会学的な観点から、高度情報社会が要請する専門的学問領域と専門的職業領域との連携を図る。この学問と職業の連携により、本専攻は、市民としての主体性とコミュニケーション能力ないしは臨床能力を備えて、現代社会に実質的に貢献できる人材養成を目標とする。ここにいう「高度情報社会が要請する専門的学問領域」とは、一つは、情報コミュニケーションに関わる諸問題の理論的かつ実証的な知の体系を再構築しようとする領域であり、もう一方は、現代社会における生と死・ジェンダーに関する社会問題について、より学際的な臨床研究を目指す領域である。そこで、本専攻では、前者の領域を軸として「情報コミュニケーション専修」、後者の領域を軸として「臨床社会学専修」を置き、この2つの専修を、現代社会の「より高度な専門的職業領域」として位置付け、本専攻の2本柱とする。

前者の「情報コミュニケーション専修」が養成しようとする人材像とは、さまざまな「情報」の収集・検索・分析・加工・統合など、いわゆる情報処理のすべての課程に精通したエキスパートであり、また、教科「情報」の教職資格のステップアップを目指す社会人が専修免許を望む場合の受け皿ともする。後者の「臨床社会学専修」では、生と死・ジェンダーに関する社会問題について臨床的な観点から捉え、保育士・教員・臨床心理士・看護師・社会福祉士・介護福祉士・医師及び研究者らが現代社会で求めら

れる臨床的知識と技能を目指す。この種の実践能力を有する臨床・教育の専門家を養成するために、本専修は、学部卒業者はもとより、教員ほか、各種資格を既に有する者を含めて、広く社会人を対象とするものである。

このような教育を推進するため、以上の2専修とともに、基礎科目及び研究指導の区分を設け、以下のような教育課程を編成している。

基礎科目では、研究と教育の基礎を固めるため、使用言語を英語のみで行い、クリティカル・シンキングとして「Developing Critical Thinking Skills」と「Critical Reading and Writing」の2科目を開設し、学生の基礎的知識力・能力等に応じて履修させる。

情報コミュニケーション専修では、高度情報社会における情報処理のエキスパートと教科「情報」の担当教員のステップアップを目的にしている。もちろん、将来、研究者として大学や研究機関に地位を得る者が出ることも期待している。また、情報についての高い教養と専門的知識を身につけて特定の職業に就く者も出るであろう。いずれの道をたどるにしても、共通に身につけておくべき能力として、本専修では次の3つを想定している。第一点目は、そもそも「情報」とは何であるのか、情報コミュニケーションはどのような発展の歴史をもつのか等々についての理論的・歴史的な知識を理解する基礎力である。第二点目は、基礎力を踏まえて、現代社会における情報の生成と流通の仕組みを構造的かつ科学的に幅広く把握することのできる応用的展開力である。さらに第三点目は、「情報」を収集・検索・分析・加工・統合するための高度な技能的能力の習得であり、高等学校における教科「情報」の担当を目指す場合、この技能的能力の獲得はとりわけ重要なものとなる。このように、情報コミュニケーション専修では、現代の高度情報社会におけるコミュニケーション総過程を研究の対象に設定し、学際的な方法論、端的に言えば、文理融合的な観点から教育・研究を進めていこうとするところに特色がある。これらの目的を達成するため、先に列挙した教育目的の第一点目に対応し、「基礎理論分野」として、現代社会における情報、メディア、コミュニケーションのあり方、さらに、歴史と情報社会の倫理に関する講義5科目、第二点目の目的に照応して、「社会・経済と情報分野」というカテゴリーで、新聞特論をはじめ、その背景にある経済的な動向の理解並びに現代の高度情報社会を実践的に生きるために必要な、より専門的な情報処理に関する講義・演習として、全16科目を開設している。

臨床社会学専修では、現代日本社会が抱える構造的問題のうち、特に、社会学のみならず心理学・医学・看護学・介護学・福祉学・法学・教育学等との学際的研究なくしては解明することが不可能となった、生と死・ジェンダー領域の研究を、理論的・実践的に探求する。臨床または教育現場で強く求められていながら不足している生と死・ジェンダー臨床の専門家を養成することを目的として、現場の専門家と理論研究を積んできた研究者とがチームを組むことで初めて可能となるカリキュラム編成にする。「生と死の臨床分野」、「ジェンダー臨床分野」及び「現代社会理論・社会調査分野」の3分野を設定し、以下のような教育課程を編成している。

生と死の臨床分野では、「死の意味」、「生命の尊厳」を問い、21世紀少子高齢社会にふさわしい生と死の文化を再構築することを目的とする。現代に生きるわれわれにとって死の文化の創造と再生は重要課題である。この課題達成が現代の生を豊かなものにしてゆく。そのため社会学を基礎に、心理学、看護学、介護学、社会福祉学、医学、経営学から学際的に研究をおこなう。特に在宅や高齢者施設あるいは病院におけるケアの現場で、老いること、死にゆくこと、日常の生活をどのように支えることができるのか、という問題関心を深める。具体的には、教育現場、政策立案、あるいはチーム医療を必要とする在宅療養の現場において、専門職間の連携をはかるための有用な視点とスキルを提供できるよう、講義6科目及び実習1科目を開設する。

ジェンダー臨床分野では、現代日本社会において、ジェンダー差別を構造化させる最も深刻な社会問題となった性暴力に焦点をあて、その問題解決のために、社会学を中心とし、臨床心理学・社会福祉学・医学・看護学・法律学・教育学などから学際的に研究することをめざす。特に、保育士・教員・臨床心理士・社会福祉士・介護福祉士・専門社会調査士を養成する女子大学として、女性が健康に暮らせる社会の拡充を目的とし、被害実態の把握に努めながら、被害回復・支援プログラム、加害者更正プログラム、社会制度整備、予防教育などについて調査研究を深め、政策提言や次世代支援者育成を行うことを通じ、「女性の精神的・社会的自立を支援する」という建学の精神を生かした社会貢献をめざす。性暴力被害の実態調査を担える専門社会調査士、性暴力被害者回復プログラム・加害者更正プログラムを担う臨床心理士・ソーシャルワーカー、予防教育を担う教職員、広く調査研究・政策提言を行う研究者等の養成を目的として、講義6科目及び実習1科目を開設する。

現代社会理論・社会調査分野では、このような専門家養成のために、高度な専門知識のみならず、現代社会の諸問題に関する幅広い学識と社会的視角を得るために講義7科目を開設するとともに、専門社会調査士の育成を目指し、調査研究方法、質的調査法、多変量解析の講義3科目を開設し、学際的な研究を目指している。

研究指導としての「現代社会研究特別演習」及び「現代社会研究特別研究」は全ての学生が必修となるが、この科目では、指導教員が学生に対し、研究計画の策定を支援し、修士論文の作成に向けて指導を行う。

以上のように、現代社会研究専攻では、現代社会における情報コミュニケーション及び臨床社会学に関わるさまざまな分野に関する科目を、講義科目、演習科目、実習科目として開講し、学生の教育・研究に関する多様な要求に対応できるよう教育課程を編成している。

#### ④臨床心理学専攻

臨床心理学専攻（修士課程）では、前身となる人間関係学研究科臨床心理学専攻（修士課程）と同様、臨床心理学的なアセスメント、心理面接、地域援助の理論と技法を修得し、さらに科学的思考と臨床的な態度とを身につけ、医療・教育・産業・福祉・司法などのさまざまな領域で、適切な援助、介入及び研究のできる臨床心理の専門家を養成する。

特に、臨床現場において、科学的な視点から統計的手法を駆使した研究のできる専門家を育成する。また、財団法人日本臨床心理士資格認定協会第1種「臨床心理士」受験資格認定校として、臨床心理士として必要な臨床心理査定、臨床心理面接、臨床心理的地域援助及びそれらの研究調査等に関する基礎的知識及び量的・質的研究法を含む技法を身につけられるようにする。

このような人材を養成するため、基礎科目、臨床心理学基礎分野、臨床心理学専門分野及び研究指導の区分を設け、以下のような教育課程を編成している。

基礎科目では、研究と教育の基礎を固めるため、使用言語を英語のみで行い、クリティカル・シンキングとして「Developing Critical Thinking Skills」並びに「Critical Reading and Writing」の2科目を開講し、学生の基礎的知識力・能力等に応じて履修させる。

臨床心理学基礎分野では、臨床実践の基礎となる基本的知識と技術、さらに臨床心理学の研究に必要な基礎能力を身につけることをねらいとし、そのために広く臨床心理学全般の問題を講じる臨床心理学特論、臨床実践の基本を習得するための面接特論、査定演習、基礎実習並びに実習などの講義科目、演習科目、実習科目を開設し、18単位を必修としている。

臨床心理学専門分野では、科学的思考に基づく臨床心理学研究を行う能力を身につけるために、講義科目として臨床心理学研究法特論Ⅰ（実証的研究）、事例研究法特論、心理統計学特論などを、また、臨床心理学を支える関連分野の知識を学ぶために、講義科目、演習科目として臨床認知心理学特論、発達心理学特論、社会心理学特論、精神医学特論、障害児心理学演習などを、さらにより広い分野にわたる臨床実践につながる能力を身につけるために心理療法特論Ⅰ（認知行動療法）、心理療法特論Ⅱ（分析心理学）、臨床心理学研究法特論Ⅱ（投映法基礎）、臨床心理学研究法特論Ⅲ（投映法応用）、学校臨床心理学特論、コミュニティ・アプローチ特論演習などを開設し、臨床心理の専門家としての知識・技術・技能を総合的に身につけさせることを目的としている。

研究指導としての「臨床心理学特別研究」は全ての学生が必修となるが、この科目では、指導教員が学生に対し、研究計画の策定を支援し、修士論文の作成に向け指導を行うことになる。

臨床心理学専攻では、さまざまな社会的場面への臨床心理学的介入を、これからの臨床心理学徒の課題と見据え、この課題に対応できる教育・研究を行うため、以上のようなカリキュラム編成をしている。

なお、臨床心理学専攻は、財団法人日本臨床心理士資格認定協会から第一種「臨床心理士」受験資格認定校としての指定を受けており、引き続き第一種「臨床心理士」受験資格認定校としての認定を受ける予定である。

## (2) 博士後期課程

### ①人間生活科学専攻

本博士後期課程では、人間生活科学を専攻する大学院生が当該専攻分野に関する学識を深め、将来において研究者として自立して研究活動を行い、高度に専門的な知識と技術を必要とする業務に従事しうる創造的な研究開発能力を涵養する。またあわせて、特に女性の立場から広く人間の生活現象に関わる諸問題を真摯に探求し、解決することができる有為の人材を養成し、もってわが国の生活諸科学分野に

おける学術の発展に寄与することを目的とする。

人間生活科学専攻（博士後期課程）では修士課程における健康・栄養科学専修、生活環境学専修、児童発達臨床学専修において既に習得した知識、技術をさらに深化発展させ、博士論文を完成するために必要な授業科目を精選して設け、指導に際しては主たる指導教員に加えて複数の博士後期課程担当教員による徹底した指導研究を行う。

本課程では前身である家政学研究科人間生活学専攻（博士後期課程）に設けた生活人間学、臨床人間学、生活計画学、生活素材学の各領域が取り扱ってきた生活の構成因子としての人間、被服、食物、環境の各研究領域を横断して現代社会が抱える生活にかかわる複雑な問題をより複合的、学際的に把握し、これを探求し、解明する。そのために、これらの生活の諸問題に関わる最先端の研究手法と最新の知見とを、講義と演習によって教授指導する。さらに得られた研究成果を積極的に社会に対して開示して、教育・研究活動と社会との関係を緊密に保持する。このよう本専攻に設けた4つの専修ではそれぞれの専修において最先端の学術に関する研究を行うとともに、これらの専修を越えて相互に学際的に協働して現実の諸問題に取り組むことが特徴である。

具体的には、主要4専修の研究分野として「生活人間学専修」、「臨床人間学専修」、「生活計画学専修」及び「生活素材学専修」を設定し、それぞれの専修において専門的研究・教育を行うとともに、これらの専修を横断する諸問題も、インターディシプリナリーに取り扱えるような方針のもとに教育課程を編成している。各専修における教育課程の内容等は以下のとおりである。

生活人間学専修では、個人あるいは集団としての人間と、その生活環境との関係を探求するため、気候、食物、身の回りにあるさまざまな物質、また人類が作りだした社会・文化的環境に人間はどのように適応してきたかを形態、生理機能など生物学的及び行動科学的側面から研究し、環境変化に対応して顕在化する人間の変異や進化を含む生態学的機序を明らかにするとともに近年急激に変容する環境と人間生活の相互作用について考究する。この目的のため、演習1科目、講義4科目各2単位の授業科目を開設する。

臨床人間学専修では、教育、保育、家庭等実際の生活が行われる場において、具体的な環境と関わる人間の行動を、心とからだに関する成長・発達と、その背景としての諸要因について、教育・保育・発達・臨床等の各学問領域から追求し、人間の生涯における健全な発達と、それを支えているメカニズム、さらにそれを発展させる指導法を目指し、それぞれの研究領域において、理論的、実践的な研究と指導に従事できる高度な知識・技術と研究能力を備えた人材を養成するための研究・教育を行う。この目的のため、演習1科目、講義4科目各2単位の授業科目を開設する。

生活計画学専修では、地球環境に調和し、持続性のある衣生活、食生活を創造することを目指して基本的問題を明らかにし、それぞれを改善推進するための具体的課題について研究する。衣生活に関しては、健常者のみならず、障害者・高齢者の要求をみだす被服の設計・管理、消費、再利用、再資源化の問題を考える。食生活に関しては、人間の生涯にわたり、個人あるいは集団の健康のあり方について研究するとともに、健康を増進するための諸要因とその対策を考究する。この目的のため、演習1科目、講義4科目各2単位の授業科目を開設する。

生活素材学専修では、衣生活、食生活におけるそれぞれの素材に要求される機能を整理し、素材が具備する基本的性質を究明する。衣生活にあっては、繊維及び高分子材料の構造と物性を、衣料としての観点から評価するとともに、環境に調和した性質を付与することを研究する。食生活に関しては、わが国の食生活の基盤が植物性であることをふまえ、植物性食品が有する生体調節機能成分、並びに食品成分間反応等の課題を重点的に研究する。この目的のため、演習1科目、講義4科目各2単位の授業科目を開設する。

以上の4専修では、学生個人の研究課題に即して個々の専修での問題を集中的に考究することもあり、また各専修を横断した形で人間生活科学を追究することも可能としている。

## ②言語文化学専攻

博士後期課程は、専攻分野について研究者として自立して研究活動を行い、またはその他の高度に専門的な業務に従事するために必要な高度な研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養うことを目的としている。

言語文化学専攻（博士後期課程）では、前身となる文学研究科（博士後期課程）が推進してきた専攻分野を継承するとともに言語文化学専攻（修士課程）の日本文学専攻及び英語文学・英語教育専攻における領域の教育・研究をさらに深化発展させる。すなわち専門的な業務に従事するために必要な高度の研究

能力、及びその基礎となる領域横断的な豊かな学識の養成とを基盤としつつ、内外で加速的に流動化する社会・文化の動態を読み解き、多様化し先鋭化する研究分野の動向や理論の展開に柔軟かつ強靱に適応して、自立した研究活動の成果を挙げることができる研究者養成のための研究・教育を行う。

具体的には、柱となる2領域として「日本文学専修」及び「英語文学・英語教育専修」の2専修を設定する。各領域における教育課程の内容は以下のとおりである。

日本文学専修では、その前身となる文学研究科国文学専攻（博士後期課程）が推進してきた研究・教育と同様、日本古典文学と日本近代現代文学についての専門教育を行う。文学作品に対する高度な読解・解釈に基づき、日本文学の生成と発展を研究するとともに、学際的知識の拡充にもつとめ、新たな研究状況への適応ができる研究者を養成するための研究・教育を行う。具体的には、古典文学分野と近代現代文学分野において専門的な研究・教育を行うとともに、他領域や隣接諸学にまたがる問題も取り扱えるような方針のもとに教育課程を編成している。各分野における教育課程の内容は以下のとおりである。

古典文学分野では、本学で所蔵している豊富な写本や版本などを有効に活用した研究・教育を目指し、書誌学や本文批判・本文批評を踏まえた上での論述が展開できる古典文学研究者を養成する。古代・中世の文学作品は写本で伝えられるとともに、近世期の出版文化の隆盛により、近世成立の作品も含めて数多くの版本が刊行されている。古典文学研究は、こうした写本や版本の調査研究から始発される必要があり、その能力を涵養することが本学では可能である。本学図書館及び草稿・テキスト研究所には、古代・中世期成立の物語や和歌の写本・版本類、近世期の仮名草子・浮世草子・狂歌類などを豊富に所蔵している。したがって、書誌学的研究をはじめとして当時の文化状況や出版書肆にまで立ち入った作品の成立に関する研究が容易である。一方で、古典文学研究は、歴史的に蓄積された注釈類を基にした高度な読解と、当時の社会的・文化的諸制度とのかかわり方や他領域・隣接諸学を横断した解釈をする能力も必要である。以上のように、古典文学作品を文献研究から始発して高度な読解・解釈を行うことができる研究者を養成するために、「古代文学特論Ⅰ・Ⅱ」、「中世文学特論Ⅰ・Ⅱ」、「近世文学特論Ⅰ・Ⅱ」各2単位の講義科目及び「研究指導(古代)Ⅰ・Ⅱ」「研究指導(中世)Ⅰ・Ⅱ」、「研究指導(近世)Ⅰ・Ⅱ」各2単位の演習科目を置いている。

近代現代文学分野では、本学で所蔵している近代現代作家にかかわる多種多様な諸資料を有効に活用した研究・教育を目指し、時代状況と作品生成を踏まえた上での論述が展開できる近代文学研究者や近代詩研究者を養成する。所蔵する明治初期の雑誌や新聞、及び風俗資料などによって作品を時代環境の流れに位置づける研究が可能であり、また、伊東静雄、梶井基次郎などの自筆原稿をはじめとする草稿類や書簡、そして、詩集や詩歌関係の雑誌などを活用した生成論的探求の方法を身につけることも可能である。さらに、諸資料に含まれる明治大正期における女性の生活文化を照射する史料から、近代女性の生活文化と文学とのかかわりを多角的学際的に考察する環境も整っている。以上のように、文学作品や文学状況を総合的・複合的に考察できる研究者を養成するという目的のため、「近代現代文学特論Ⅰ～Ⅳ」各2単位の講義科目及び「研究指導(近代現代Ⅰ～Ⅳ)」各2単位の演習科目を置いている。

英語文学・英語教育専修では、その前身となる文学研究科英文学専攻（博士後期課程）が推進してきた研究・教育と同様、英米を中心とする英語文学、英語教育、英語学についての高度な専門教育を行う。最新の多様な文学理論、言語理論、言語習得・教育理論を踏まえ、独創的な研究を推進することによって学問文化の向上発展に寄与する研究者の育成を図る。具体的には、英語文学分野、英語教育分野、英語学分野のそれぞれにおいて専門的な研究・教育を行うとともに、他領域や隣接諸学にまたがる問題も取り扱えるような方針のもとに教育課程を編成している。各分野における教育課程の内容は、以下のとおりである。

英語文学分野においては、文学テキストの言語的・技法的な特性に対する意識をさらに高め、正確な読解に裏づけられた精緻な作品分析と批評の実践を基盤として堅持する。加えて、作家とその創造性を見据えながらも、文学は個々の作家を超えた文化の所産と見る新しい視点に立った研究を推進し、文化の内側で緩急様々に進行する地殻変動を読み解き、さらには、国境を超えて衝突し、あるいはくぐり抜けて行き交い変容する文化の潮流をも柔軟に受けとめて、文学をめぐる動的かつ強靱な知の枠組を構築する。そのようにして伝統の静の中に動を、また奔流の中に布置を読みとる新進研究者を養成する。この目的を達成するため、演習科目として「英文学特論Ⅰ・Ⅱ」、「米文学特論Ⅰ・Ⅱ」各2単位の講義科目、「英文学特殊研究Ⅰ・Ⅱ」、「米文学特殊研究Ⅰ・Ⅱ」、「研究指導(英文学)Ⅰ・Ⅱ」、「研究指導(米文学)Ⅰ・Ⅱ」各2単位の演習科目を置いている。

英語教育分野においては、国際化の進展と多言語主義の広がりの中で、特に第2言語習得理論、外国語教授理論、評価論、教師論、教材論、外国語教育政策の分野で昨今急速な発展を遂げている。そこで、まず、英米を中心とするこれらの研究動向を体系的に理解し、最先端の問題意識を共有する。次に、そこから得られる知見を我が国固有の英語教育環境にどのように適用させるべきかの視点を持ち、独自の研究課題を築いていく。こうして、文献研究、実証研究、フィールドワーク、課題発見能力などの研究技能を向上させ、また、学会発表などの場で発表技能を高めることにより、高度な研究推進能力を身につけ、研究者としての自律性を養う。この目的のため、講義科目として、「英語教育学特論Ⅰ・Ⅱ」各2単位、演習科目として「英語教育学特殊研究Ⅰ・Ⅱ」、「研究指導(英語教育学)Ⅰ・Ⅱ」各2単位を置いている。

英語学分野においては、一般言語理論及び語用論を踏まえて、英語の構造と機能に関わる普遍的性質と個別的性質を理論的・実証的に捉える研究能力の養成を目指す。このためにまず、現代言語学の枠組みにおける英語の統語論・形態論・意味論・音韻論の基礎的な研究方法を会得させる。またこれらの基礎の上に、英語の発話の生成と解釈の過程を発話行為理論をはじめとする語用論の枠組を用いて分析し、さらに談話文法あるいはテキスト言語学の観点から、文学作品を含む多種多様な英語談話を分析することを通して言語のテキスト構成原理の解明を試みる。さらに、ことばと認知、ことばと社会、日英語の対照的研究などについても取り上げる。この目的のため、講義科目として「英語学特論Ⅰ・Ⅱ」各2単位、演習科目として「英語学特殊研究Ⅰ・Ⅱ」、「研究指導(英語学)Ⅰ・Ⅱ」各2単位を置いている。

言語文化学専攻においては、以上のように教育課程を編成しているが、学生個人の研究課題に即して個々の領域での問題を集中的に考究することも、各領域を横断した広い視野からする日本文学の総体、英語文学、英語学、英語教育学を考究することも可能としている。

## 5. 教員組織の編成の考え方及び特色

大学院の教員組織としては、教授、准教授、講師、助教及び兼任講師で組織されている。

各専攻のカリキュラムに基づき、授業科目を担当する研究分野に優れた教育・研究業績歴を有する専任教員が授業科目及び研究指導を担当する。なお、専任教員がカバーできない一部の授業科目については、兼任教員を配置している。

研究科内に設置されている人事審査委員会、研究科委員会において、担当科目及び研究分野の研究指導の適否について、教員の履歴、教育・研究業績等により、大学院担当教員としての資格審査を実施し、大学院設置基準に定める必要な研究指導教員及び研究指導補助教員以上の教員を配置している。

各専攻における担当教員の状況は以下のとおりである。

また、教員の年齢構成は、【図4】のとおり、修士課程では30歳代から70歳以下まで、博士後期課程では40歳代から70歳まででバランス良く構成されており、教育研究水準の維持向上及び教育研究の活性化に支障がない構成となっている。

なお、修士課程の人間生活科学専攻、言語文化学専攻及び現代社会研究専攻では、授業を千代田校地（東京都千代田区三番町12番地）及び多摩校地（東京都多摩市唐木田2丁目7番地1）の両校地で開講する。

千代田校地、多摩校地間の移動時間は約60分ほどであるため、学生及び教員に負担がかからないよう、千代田校地、多摩校地それぞれで開講する授業科目の開講曜日・時限を調整するなど授業時間割編成の際に十分配慮する。

各専攻の千代田校地、多摩校地における専任教員の配置状況は、【図5】のとおりである。

### (1) 修士課程

人間生活科学専攻では、専任教員の内、既設の研究科からの担当教員28名と学部の専任教員で今回新たに大学院を担当する教員11名が授業を担当する。

教授28名、准教授10名、講師1名と兼任教授1名、兼任講師11名で、博士の学位取得者は31名である。

開設83科目中68科目を専任教員が担当するが、各領域・区分ごとに必ず研究分野を担当するに十分な教育・研究業績歴を有する専任教員を配置している。

また、研究指導となる人間生活学特別研究は、専任教員25名（教授22名、准教授3名）が担当し、入学定員12名の学生に対し、きめ細かな指導を行う体制を整えている。

授業科目は千代田校地での開講が主となるが、多摩校地でも一部の授業を開講する。

**言語文化学専攻**では、専任教員の内、既設の研究科からの担当教員19名と学部の専任教員で今回新たに大学院を担当する教員18名が授業を担当する。

教授30名、准教授3名、講師2名、助教2名と兼任教授1名、非常勤講師2名で、博士の学位取得者は10名である。

開設科目93科目中84科目を専任教員が担当するが、各領域・区分ごとに必ず研究分野を担当するに十分な教育・研究業績歴を有する専任教員を配置している。

また、研究指導となる言語文化学特別研究は教授29名が担当し、入学定員8名の学生に対し、きめ細かな指導を行う体制を整えている。

授業科目は千代田校地での開講が主であるが、多摩校地でも一部の授業を開講する。

**現代社会研究専攻**では、専任教員の内、既設の研究科からの担当教員14名と学部の専任教員で今回新たに大学院を担当する教員14名が授業を担当する。

教授22名、准教授5名、講師1名と兼任教授2名と非常勤講師8名で、博士の学位取得者は17名である。

開設科目49科目中41科目を専任教員が担当するが、各領域・区分ごとに必ず研究分野を担当するに十分な教育・研究業績歴を有する専任教員を配置している。

また、研究指導となる現代社会研究特別演習及び現代社会研究特別研究は専任教員18名(教授14名、准教授4名)が担当し、入学定員6名の学生に対し、きめ細かな指導を行う体制を整えている。

授業科目は多摩校地での開講が主であるが、千代田校地でも一部の授業を開講する。

**臨床心理学専攻**では、専任教員8名すべてが、既設の研究科からの担当教員である。

教授4名、准教授3名、助教1名と兼任教授1名、非常勤講師9名で、博士の学位取得者は5名である。

開設科目27科目中18科目を専任教員が担当するが、各領域・区分ごとに必ず研究分野に優れた教育・研究業績歴を有する専任教員が配置されている。また、研究指導となる臨床心理学特別研究は専任教員5名(教授4名、准教授1名)が担当し、入学定員6名の学生に対し、きめ細かな指導を行う体制を整えている。授業科目はすべて多摩校地での開講となる。

## (2) 博士後期課程

博士後期課程における専任教員は、既設の家政学研究科及び文学研究科の博士後期課程を担当していた26名の教員で構成されている。なお、博士後期課程は各専攻とも千代田校地での授業開講となる。

**人間生活科学専攻**では、専任教員14名すべてが、既設の研究科からの担当教員である。教授13名、准教授1名と非常勤講師3名で、博士の学位取得者は15名である。

開設科目20科目中17科目を専任教員が担当するが、各領域に必ず研究分野に優れた教育・研究業績歴を有する専任教員を配置している。また、入学定員3名に対し、教授13名と准教授1名とできめ細かな研究指導を行う体制が整えられている。

**言語文化学専攻**では、専任教員の内、既設の研究科からの担当教授12名が授業を担当する。博士の学位取得者は2名である。

開設科目44科目とも研究分野に優れた教育・研究業績歴を有する専任教員が担当する。入学定員3名に対し、教授11名できめ細かな研究指導を行う体制が整えられている。

【図4】大学院担当専任教員の年齢構成

(修士課程) 人

専攻・職名 年齢	人間生活科学専攻				言語文化学専攻				現代社会研究専攻				臨床心理学専攻				合計				
	教	准	講	助	教	准	講	助	教	准	講	助	教	准	講	助	教	准	講	助	合
40歳以下			1				2	1			1			1		1		1	4	2	7
41歳～45歳		3			1	1				2				1			1	7			8
46歳～50歳	2	6			3	2		1	2	2				1			7	11		1	19
51歳～55歳	7	1			4				4								15	1			16
55歳～60歳	5				7				5	1			2				19	1			20
61歳～65歳	7				7				4				1				19				19
66歳～70歳	7				8				7				1				23				23

(博士後期課程)

人

専攻・職名 年齢	人間生活科学専攻				言語文化学専攻				合 計				
	教 授	准 教 授	講 師	助 教	教 授	准 教 授	講 師	助 教	教 授	准 教 授	講 師	助 教	合 計
41歳～45歳													
46歳～50歳		1								1			1
51歳～55歳	3				1				4				4
55歳～60歳	4				5				9				9
61歳～65歳	2				4				6				6
66歳～70歳	4				2				6				6

【図5】千代田校地、多摩校地の教員の配置状況

人

校地・職名 専攻	全 体					千代田校地					多摩校地				
	教 授	准 教 授	講 師	助 教	合 計	教 授	准 教 授	講 師	助 教	合 計	教 授	准 教 授	講 師	助 教	合 計
人間生活科学専攻	28	10	1		39	21	10			31	7		1		8
言語文化学専攻	30	3	2	2	37	22	1	2	2	27	8	2			10
現代社会研究専攻	22	5	1		28	2				2	20	5	1		26
臨床心理学専攻	4	3		1	8						4	3		1	8

博士後期課程の授業は全て千代田校地での開講となる。

## 6. 教育方法、履修指導、研究指導の方法及び修了要件

### (1) 修士課程

シラバスに従い教員自らの研究成果を参考に、多くの講義科目、演習科目、実験・実習科目を設定し、教育方法や能力を養えるような教育を実施する。

修了要件は、修士課程に2年以上在学し、所定の授業科目について30単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で、本学の行う修士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件とし、修了者に対し修士の学位を授与する。

なお、履修した授業科目については試験を実施する。試験は、筆記、口述又は研究報告等により授業担当者が行う。各授業科目の成績評価は、S(100点～90点)、A(89点～80点)、B(79点～70点)、C(69点～60点)及びD(59点以下)をもってこれを表し、S、A、B、Cを合格とし、Dを不合格とする。合格した授業科目に所定の単位を与える。

また、修士論文の審査及び最終試験は、研究科委員会の選出した審査委員が行う。審査委員は、指導教員を主査とし、これに当該論文に関連のある授業科目の担当教員2名以上を加え、審査委員会を構成する。最終試験は所定の単位を修得し、かつ修士論文の審査に合格した者について、修士論文及びこれに関連のある研究領域について口述によって行う。ただし、必要がある場合は筆記試験を課すことがある。論文及び最終試験の成績評価は、合格または不合格の評語をもって表す。審査委員会は、論文審査及び最終試験が終了したときは、その結果に学位授与についての意見を付した審査報告書を研究科委員会に提出し、研究科委員会において学位授与の可否を判定する。

各学生の研究課題に対応した指導教員1名と関連分野を担当する副指導教員1名を入学時のガイダンスにおいて定める。指導教員及び副指導教員は、学生に対して責任を持って学位取得に向けて、随時履修指導及び研究指導を担当する。

履修指導にあたっては、主となる専修の科目を中心としながら、学生の研究課題・学力・能力等に応じて、基礎科目、共通科目の履修及び必要に応じて他専修、他専攻の科目の履修についても指導・助言を行う。

研究指導は、各専攻で開設する「特別研究」において、研究方法の確立、研究計画の立案、論文主題提示の方法、論文構成の仕方、発表方法等の指導を行い、研究者としての能力を養う。論文の題目提出、題目変更届、論文提出の日程に合わせて指導し、2年次当初には中間報告会を行い、研究主題、目的の設定、

研究法選定の妥当性、術語使用の適切性、関連文献の渉猟等について討議し進捗状況を把握する。この討議を参考にして、今後の研究への取り組みについて学生を指導するとともに、機会を得て学内外の研究会及び学会での発表を行わせ、学位論文の作成、学位論文の公開発表、学位取得へと繋げていくことになる。

なお、研究に必要な研究費を予算化（学生1人に対し年間約6万円）し、学生をサポートする。

入学定員が6名～12名と少人数のため、入学時から学位取得まで、きめ細かな指導を行うことが可能となる。

また、修士論文作成にあたり、教育研究上必要な場合は、他専攻の授業科目の履修を8単位まで認めるとともに、他大学院で修得した単位及び入学前の既修得単位についても、本学の大学院における授業科目の履修により修得したものとして、合わせて10単位を超えない範囲で単位の認定を行うことができるものとする。

なお、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者については、大学院に1年以上在学すれば足りるものとしている。

また、人間生活科学専攻及び現代社会研究専攻では、社会人に対し、大学院設置基準第14条の特例を適用し、土日夜間や長期休暇を利用し、授業・研究指導も実施するとともに長期履修生制度も利用できるようにする。

研究指導の具体例については、以下のとおりである。

人間生活科学専攻（健康・栄養科学専修）	
研究題目	新しい機能性を有する米粉の調理科学的研究
養成する具体的な人材像	食育を担う専門家及びそれらに必要な技術開発を行える専門家
研究内容	我が国の食糧自給率は周知の通り先進国の中でも最低の40%前後の状態が続いている。耕地面積の少ない日本で風土にあった作物の需要を維持するため、現在、米に対する試作が多領域から検討されている。主食の自給率を高めることは、日本の食糧自給率を上昇させる一手段として貢献できるものと考えられる。そこで、本研究は、米粉を主材料として、スポンジ状構造を有するパン様製品の新たな開発を試みる。ここで特記すべき点は、小麦粉から抽出したグルテンを米粉に加える方法とは異なり、グルテンは用いない点である。パン生地用いられる材料には、粉類の他、膨化剤(酵母)、砂糖、水、食塩、油脂類が挙げられる。米粉独特の粘性を利用するため予め米粉の一部を加熱糊化して用いる、膨化補助剤として食物繊維類など種々の機能性資材の影響を検討する、調製工程を再構築するなどの観点から新しい主食用食品の開発の糸口を見いだしていこうとするものである。
指導教員	市川朝子教授 全般的指導、研究テーマの選定、研究計画、研究方法・研究結果の整理と考察、研究発表、修士論文の作成 松本美鈴教授 研究方法・研究結果の整理と考察
履修科目	1年次
	2年次
	(共通科目) ヒトと環境(2単位) (栄養化学分野) 栄養生化学特論(2単位) 栄養生化学・細胞学実験(1単位) (食品・機能学分野) 食品微生物学特論(2単位) 食品機能学特論(2単位) 食品・機能学領域実験(1単位) 食生活安全学(2単位) (調理科学・食嗜好学分野) 調理科学特論(2単位) 調理科学特論演習(2単位)
	(調理科学・食嗜好学分野) 食嗜好学特論(2単位) 食嗜好学特論演習(2単位)
	(研究指導)人間生活科学特別研究(10単位)
	必修1科目10単位、選択11科目20単位、合計12科目30単位履修

人間生活科学専攻（生活環境学専修）	
研究題目	環境試料による生活環境の現状と変遷の解明に関する研究
養成する具体的な人材像	環境関連企業・部門、環境関連研究所などの専門職員
研究内容	人類活動は地球環境に著しい影響を与えているが、持続可能な人類社会を構築するには、生活環境や地球環境を解明するための基礎的な研究が重要である。多摩川等の都市河川の表層堆積物は、過去数十年間の平均的な生活環境の特徴を反映すると考えられる。また、急激に住宅開発や道路整備により都市化が進行した、千葉県北西部地域にある印旛沼等の湖底堆積物コアは、流域の生活環境の変遷過程を記録していると期待される。本研究ではこれらの堆積物試料中および関連する水などの環境試料中の、自然および人為起源の有機成分（有機炭素、炭化水素、脂肪酸、ステロール、フェノールカルボン酸、ビスフェノールA等の外因性内分泌攪乱化学物質）を、ガスクロマトグラフィー・マスマスペクトロメトリー等により分析を行う。これらを指標とし、環境条件と関連して詳細に検討し、生活環境の現状と変遷過程を明らかにする。
指導教員	井上源喜教授 全般的指導、研究テーマの選定、研究計画、研究方法、研究結果の整理と考察、研究発表・プレゼンテーション等 生田 茂教授 研究方法、研究結果の整理と考察
履修科目	1年次
	2年次
	（共通科目） ヒトと環境(2単位) 健康科学(2単位) （環境サイエンス分野） 生命環境特論（2単位） 生活環境特論(2単位) 地球環境特論I（2単位） 環境衛生学特論（2単位）
	（環境サイエンス分野） 生活環境特論演習（2単位） 地球環境特論演習I（2単位） 地球環境特論II（2単位） （生活環境デザイン分野） 生活環境学特別講義（2単位）
	（研究指導）人間生活科学特別研究（10単位）
	必修1科目10単位、選択10科目20単位、合計11科目30単位履修

人間生活科学専攻（児童発達臨床学専修）	
研究題目	乳幼児期における発達の遅れや障害を有する子どもの保育のあり方に関する研究
養成する具体的な人材像	高度な専門性を身に付けた保育士、幼稚園教諭
研究内容	乳幼児期は、発達による変化が著しい時期である。この発達についての基礎的な理解を深め、保育所保育指針や幼稚園教育要領などに示される発達観について正しく理解する。具体的には、日常の保育の中で、乳幼児は能動的・主体的に周囲の人や物（環境）との相互作用を通して発達を遂げていくが、この相互作用的発達観についての捉え方を身につけること。また、乳幼児がかかえる発達上の困難（乱暴・かみつきの発達的課題）、育ちの気がかりな子ども、障害を有する子ども等に対し正しい理解が持てるようにし、望ましい保育（幼児教育）のあり方について検討する。集団保育場面におけるカリキュラムの見直しや開発のための基礎となる理論と実践の方法を探る。
指導教員	柴崎正行教授 研究計画、研究の全般的指導、発達研究や障害児保育の先行研究、まとめ 阿部和子教授 乳幼児の成長、発達とその保育に関する研究
履修科目	1年次
	2年次
	（共通科目） 研究方法論Ⅱ（フィールド研究）(2単位) （基礎教育分野） 児童発達臨床学基礎理論（2単位） 乳幼児発達臨床特論（2単位） 臨床教育学特論（2単位） （保育・教育分野）
	（保育・教育分野） 幼児教育実践演習（2単位） 芸術教育研究特論（2単位） （心理・社会・文化分野） 教育心理学特論（2単位）

	乳幼児発達保育研究特論 (2単位) (心理・社会・文化分野) 子ども家庭福祉学特論 (2単位) 社会精神医学特論 (2単位)	
	(研究指導) 人間生活科学特別研究 (10単位)	
	必修1科目10単位、選択10科目20単位、合計11科目30単位履修	

言語文化学専攻 (日本文学専修)		
研究題目	平安文学における住空間の研究—『源氏物語』を中心として—	
養成する具体的な人材像	文学作品を歴史的文化的背景から理解できる人材を養成する	
研究内容	平安時代貴族住宅の住空間のありようが、文学作品の世界とどのようにかかわっているかを追求したい。当時の貴族住宅は寝殿造と呼ばれ、その構造や仕組みは建築史の成果によってある程度明らかにされている。特に、当時の古記録や儀式書などによって公的な儀式・行事における寝殿造の用途については、かなり研究が進んでいる。しかし、日常生活における住まい方については、それほど明らかになっているとは言い難い。本研究では、『源氏物語』を資料として、寝殿・対の屋・渡殿・中門廊などの各建築物における日常的な使用法を、格子・妻戸あるいは障子・屏風・几帳などの建具・屏障具の機能に着目することで明らかにしていきたい。寝殿造は開放性をその特色の一つとするが、日常生活においては、様々な屏障具などで区画されて便宜に供されていた。そのありようを『源氏物語』から探ることは、文学研究にとどまらず、住居学や建築史などとも関連することになる。文学作品を資料として、平安時代の住空間を明らかにすることを目標としたい。	
指導教員	倉田 実教授 研究全体の指導、貴族住宅研究の指導 柏木 由夫教授 平安文学研究の指導	
履修科目	1年次	2年次
	(基礎科目) 日本文学研究方法論 (2単位) 日本文学基礎演習 (2単位) (共通科目) 草稿・テクニスト学 (2単位)	(古典文学分野) 中世文学演習Ⅰ (2単位) 中世文学演習Ⅱ (2単位) 古代文学演習Ⅱ (2単位)
	(古典文学分野) 古代文学講義Ⅰ (2単位) 古代文学講義Ⅱ (2単位) 古代文学演習Ⅰ (2単位)	(関連分野) 語学文学特論Ⅰ (2単位) 語学文学特論Ⅱ (2単位)
	(研究指導)言語文化学特別研究 (8単位)	
	必修1科目8単位、選択11科目22単位、合計12科目30単位履修	

言語文化学専攻 (英語文学・英語教育専修)		
研究題目	日本の学習環境におけるタスクを利用する英語学習活動の研究	
養成する具体的な人材像	洗練された言語センスと言語学的方法を身につけ、言語教育の課題を解決できる人材を養成する	
研究内容	現行の学習指導要領が、「実践的コミュニケーション能力」の育成を英語科の目標として掲げて以来、タスクを利用する英語活動という新たなアプローチが教育現場で注目を集めている。タスクの定義はWillis(1996)が広く用いられるが、ESLとは異なるEFL環境下である日本独自の定義が必要である。また、コミュニケーション能力を包括的に育成するためにはタスクを分類するカテゴリー設定が必要である。さらに、国内で評価を受ける指導書が提案するタスクのカテゴリーへの分類状況からは偏りがうかがえ、是正の余地が残されている。本研究では、こうした問題意識に立ち、わが国におけるこの学習法の現状の問題点を指摘し、解決策を考察する。	
指導教員	伊東 武彦教授 指導計画、タスクに関する先行研究の理解、指導、統括 村上 丘教授 文法理論、英語法研究に関わる指導	

	1年次	2年次
履修科目	(基礎科目) Developing Critical Thinking Skills (1単位) Critical Reading and Writing (1単位) Professional English (2単位)	(英語教育分野) リーディング・リスニング指導演習 (2単位) 児童英語コミュニケーション演習 (2単位) 児童英語カリキュラム研究 (2単位)
	(共通科目) 児童文学論 (2単位)	(英語学分野) 語法文法研究 (2単位) 発話の機能 (2単位)
	(英語教育分野) 英語教授法研究 (2単位) 英語教育リサーチ方法 (2単位) スピーキング・ライティング指導演習 (2単位)	
	(研究指導) 言語文化学特別研究 (8単位)	
	必修1科目8単位、選択12科目22単位、合計13科目30単位履修	

言語文化学専攻 (国際文化専修)		
研究題目	多民族国家の言語政策と教育における文化的同化・多様化	
養成する具体的な人材像	激動するグローバリズムに対応して、柔軟に思考しかつ国際的に行動できる専門的職業人及び実践的研究者	
研究内容	ロシアなどをはじめとする多民族国家は、これまで常にエスニック共同体における「母語」対「非母語」の強度の緊張関係を背景に、アイデンティティ・クライシスの問題を抱えてきており、連邦崩壊後の現在もなお多くのエスニック・コンフリクトが観察される。その中心的表現は民族言語政策並びに教育に明確に反映され、前者では教授用言語と教科目言語、後者では主として教育カリキュラムの位相において歴史的価値やシンボルへの回帰、近代合理主義の導入による市場化と民主化の推進、欧米や他の社会主義国家との協調と接近といった社会・文化的ベクトルを内包している。本研究では、広範な先行研究の成果に学びつつ、隣接領域の問題点と課題を視野におさめながら国際教育論的アプローチを中核に据えて、言語とアイデンティティ形成の具体的な問題を明らかにしていきたい。	
指導教員	森岡 修一教授 研究計画、全般的指導、文献探索の方法及び先行研究の評価と利用法、指導、統括 松村 茂樹教授 多民族地域研究の方法に関する指導、探索文献と利用法	
履修科目	1年次	2年次
	(基礎科目) 国際文化研究法 (2単位)	(地域文化分野) ヨーロッパ文化演習 (東中欧・ロシア) II (2単位) アジア文化演習 (中国) II (2単位)
	(地域文化分野) ヨーロッパ文化演習 (東中欧・ロシア) I (2単位) アジア文化演習 (中国) I (2単位) ヨーロッパ文化演習 (イギリス) I (2単位) 太平洋文化演習 I (2単位)	ヨーロッパ文化演習 (イギリス) II (2単位) 太平洋文化演習 II (2単位)
	(国際分野) 国際教育論 (2単位) 国際関係論 (2単位)	
	(研究指導) 言語文化学特別研究 (8単位)	
	必修1科目8単位、選択11科目22単位、合計12科目30単位履修	

現代社会研究専攻（情報コミュニケーション専修）		
研究題目	メディアの社会的影響に関する研究—マスメディアとインターネットの比較を通して	
養成する具体的な人材像	IT社会における各種メディアの作用について実証的な事例を通して、理解し、分析し、応用できる人材の養成	
研究内容	現代社会はメディアの多様化が著しく進展した社会である。実際、人々は日常的に新聞やテレビという既存の各種マスメディアと接することによって、さまざまな情報を入手するとともに、インターネットからも多様な情報を入手しつつ、自己の意思決定に役立てている。これら各種メディアの社会的影響を実証的に考察するためには、第1に、それぞれのメディアが有している固有の機能や作用の基本的な理解が必要となる。その基本的な理解を踏まえて、第2に、個々のユーザーの観点から、メディア利用の類型化を行い、利用類型ごとの分析が必要となる。言い換えれば、新聞を熱心に読むユーザーと、テレビを頻繁に見るユーザー、そして、今日のインターネットの利用が多いユーザー、それぞれのケースの実証的な分析が必要になる。さらに、第1、第2の考察の上に、第3に、メディア・パフォーマンスの観点からのアプローチも欠かすことはできない。本研究は、以上の3つの観点から総合的に研究を進め、現代社会の構造的特質へのより深い理解を目指すものである。	
指導教員	前納弘武教授 研究計画、全般的指導、社会情報論的観点からの研究指導 千川剛史教授 情報社会論的観点からの指導	
履修科目	1年次	
	2年次	
	（基礎科目） Developing Critical Thinking Skills (1単位) Critical Reading and Writing (1単位) （基礎理論分野） 社会情報研究基礎論 (2単位) メディア研究基礎論 (2単位) コミュニケーション研究基礎論 (2単位) 情報社会及び情報倫理特論 (2単位) 社会情報の歴史 (2単位)	（社会・経済と情報分野） 新聞特論 (2単位) 放送・通信特論 (2単位) マスコミ言語特論 (2単位)
	（研究指導）現代社会研究特別演習 (4単位) 現代社会研究特別研究 (8単位)	
必修2科目12単位、選択10科目18単位、合計12科目30単位履修		

現代社会研究専攻（臨床社会学専修）	
研究題目	DV家庭で成育した学生の自立支援に関する研究
養成する具体的な人材像	既に保育士・教員・臨床心理士・社会福祉士などの資格を有し、セクシャルハラスメント・DV・児童虐待・性暴力被害の経験がある女性・子どもに接する際、より適切な教育・支援を行うことのできる人材の養成。または上記被害の実態を調査できる専門社会調査士。
研究内容	現代日本において、約3人に1人の女性が夫・恋人からDVを受けた経験がある一方、女性が不本意退職する原因の第1位はセクシャルハラスメントとなり、相談件数も年間11,000件を超えた（2006年）。また、児童虐待の相談件数は年間4万件を超え（2008年）、性犯罪は年間1万件、ストーカーは年間14,000件に上る。いまや、これらの暴力は女性・子どもの健康を損なう原因の上位を占め、女性の社会的地位や日本の家庭を根底から揺るがしていることが指摘されながら、その実態と構造的要因は十分解明されていない。そこで、意識と実態を把握する社会調査方法論を学んだ上で、修士論文では実際に調査を行い、その結果を分析することを通じて、広く被害者のケアと支援のあり方を研究する。特に、「DV家庭で成育した学生の自立支援に関する研究」として、DV家庭で成育した経験と自立に至る過程から、何が自立を困難にする要因であるかを分析し、いかによりよい自立支援

	を進めることができるか、臨床社会的に深い理解を目指すものである。	
指導教員	鄭暎恵教授 研究計画、全般的指導、ジェンダー臨床研究的観点からの研究の理解、指導、統括 丹野真紀子准教授 社会福祉学の観点からの研究指導	
履修科目	1年次	2年次
	(ジェンダー臨床分野) ジェンダーの社会学 (2単位) ジェンダーと医療 (2単位) ジェンダーとメンタルヘルス (2単位) ジェンダーと法律学 (2単位) (現代社会理論・社会調査分野) アイデンティティ論 (2単位)	(ジェンダー臨床分野) 性暴力に関する調査と方法 (2単位) 社会福祉援助論 (女性と自立支援) (2単位) ジェンダーと臨床特別実習(インターシップ) (2単位) (現代社会理論・社会調査分野) 調査研究方法 (2単位)
	(研究指導) 現代社会研究特別演習 (4単位) 現代社会研究特別研究 (8単位)	
	必修2科目12単位、選択9科目18単位、合計11科目30単位履修	

臨床心理学専攻		
研究題目	心理学的アセスメントと心理療法の統合的活用に関する研究	
養成する具体的な人材像	(財)日本臨床心理士資格認定協会の認める臨床心理士、医療機関における心理カウンセラー、開業心理療法士、スクールカウンセラー等	
研究内容	心理学的アセスメントは精神医学的な診断と異なり、クライアントやその人を取り巻く人的・物的環境に関する可能性の発見と予測であるという側面も持っている。その意味において、心理学的アセスメントはすでに心理療法の一部であるとも言える。従来ロールシャッハテストやTATテストを中心とする心理検査の結果は、それが治療そのものの中で活用されることはあまりなく、また、活用しようとする場合でも、治療者独自の経験や勘に頼ってケース・バイ・ケースでおこなわれることが多かった。そこで、このような心理検査を使用した場合の心理学的アセスメントと、その後続く心理療法とをどのように有機的に統合し、活用するかに関して、多くの事例に即しながら、ある程度のスタンダードや法則性を見出し、モデル化していくための研究をしていく。	
指導教員	深津千賀子教授 研究計画、全般的指導、統括 西河 正行教授 アセスメントに関する先行研究の理解、指導	
履修科目	1年次	2年次
	(臨床心理学基礎分野) 臨床心理学特論 (4単位) 臨床心理面接特論A (2単位) 臨床心理面接特論B (2単位) 臨床心理査定演習A (2単位) 臨床心理査定演習B (2単位) (臨床心理学専門分野) 臨床心理学研究法特論I (実証的研究法) (2単位) 臨床心理学研究法特論II (投映法基礎) (2単位)	(臨床心理学基礎分野) 臨床心理基礎実習 (2単位) 臨床心理実習 (2単位) 臨床心理特別実習 (2単位) (臨床心理学専門分野) 臨床認知心理学特論 (2単位) 精神医学特論 (2単位)
	(研究指導) 臨床心理学特別研究 (4単位)	
	必修9科目22単位、選択4科目8単位、合計13科目30単位履修	

## (2) 博士後期課程

博士論文の高度な専門性を重視し、多くの講義科目と演習科目を設定し、最新の研究成果を用いて研究者としての能力を養う専門性の高い教育を実施している。

博士後期課程に3年以上在学し、所定の授業科目について、人間生活科学専攻は3科目6単位以上を、言語文化専攻6科目12単位を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上で、本学の行う博士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件とし、修了者に対し博士の学位を授与する。

学位論文の審査は、学年の3年次以降に、研究科委員会の議を経て、主査1名、副査2名を含む3名以上の委員から構成される審査委員会によって行われる。審査委員会は、学位論文の審査、博士論文を中心とし関連する分野について口述又は筆答による最終試験、学位論文の公開発表並びに学力の確認を行い、学位論文の内容の要旨、審査結果の要旨及び最終試験の結果の要旨に学位を授与できるか否かの意見を添えて研究科委員会に文書で報告し、研究科委員会において、学位授与の可否を議決することになる。

学生の履修・研究指導にあたっては、入学時に学生の自主性と経験を重視して研究課題を決め、学生の研究課題に対応して、指導教員1名と副指導教員2名の教員からなる研究指導チームを組織し、多角的、総合的な研究を促進させる。

指導教員は、研究者として自立できる基礎学力の向上と専門の教養を身につけ、実質的な専門性の高い研究遂行能力を発揮できるように指導を行い、学位取得へと繋げていくことになる。また指導の一環として、専門分野の学会での発表をさせることになる。

なお、論文作成のための調査研究や学会発表等の旅費が予算化（学生1人に対し年間30万円）されており、授業時間外の研究をサポートしている。

研究指導の具体例については、以下のとおりである。

人間生活科学専攻（生活人間学専修）	
研究題目	無文字社会における身体技法による生活文化の伝承とその学習過程
養成する具体的な人材像	人間の生活を根源的に探求し続ける研究者を養成する
研究内容	無文字社会で人間は如何に生活文化を伝承してきたかに関する研究を行う。調査対象を東南アジアの山岳少数民族無文字社会に生きる山岳少数民族とし、そこで行われている文化的営為として女性の機織や男性の家の建築を取り上げ、これらの物質文化を人間がその身体技法によってどのように設計し、計測し、道具を用いて製作してゆくのかを研究する。さらにその技術は親から子に、さらに孫に文字を用いずに、どのように伝承しているのか。子どもたちはその技術をどのように学習しているのか。それらの伝承システムはいかなるものであるのか、をフィールド調査とその厳密なデータ化と統計解析によって探求する。
指導教員	大澤清二教授 研究全体の指導、身体技法とその評価方法 阿部栄子教授 機織の伝承技法に関する指導 金田卓也教授 子どもの発達と技術の伝承に関する指導
履修科目	発達環境学演習（2単位）、比較子ども文化論演習（2単位）、被服設計学演習（2単位）

人間生活科学専攻（臨床人間学専修）	
研究題目	専門職としての保育者養成に関する臨床人間学的研究
養成する具体的な人材像	保育・教育に関する理論的・実践的な研究と指導に従事できる高度な知識・技術と研究能力を備えた人材
研究内容	保育所、幼稚園など保育現場で行われる日々の保育の質的向上のためには、よりよい保育者養成が不可欠と考えられる。幼保一元化の動きと併行して進められる認定子ども園事業の開始に伴い、幼稚園教諭免許状や保育士資格など免許・資格制度のあり方が問われている。本研究は子どもの健全な発達を援助する保育者の人としてのあり方に着目し、保育者に求められる人間性と専門性を高めるための養成のあり方についての臨床人間学的研究である。そこで、保育者に求められる人間性とは、主として感性豊かな保育者であり、専門性とは保育に関する高度な知識技術を身に付けた保育者であるといえる。このことから、この人間性と専門性の両者を有する保育者については「資質・能力・知識・技能を総合的に携えている人」とまとめることができる。保育現場では、このような保育者を理想の姿とみる見方があるが、本研究では、それらの個々の課題についての検討と、それらを支えるメカニズム、さらにそれを身に付けさせるための養成のあり方について、新しい視点から分析し、考察する。
指導教員	松本寿昭教授 研究全体の指導、保育者養成のあり方、子ども家庭福祉学特論 柴崎正行教授 幼稚園における望ましい保育者像、乳幼児保育学特論 田代和美准教授 保育場面における保育臨床、発達臨床学特論

履修科目	子ども家庭福祉学特論（2単位）、乳幼児保育学特論（2単位）、比較子ども文化論演習（2単位）
------	---

人間生活科学専攻（生活計画学専修）	
研究題目	高齢者において咀嚼・嚥下を容易にする食物の物性に関する研究
養成する具体的な人材像	高齢者のよりよい食生活を確立するための研究を推進できる能力と対策を提案できる人材を育成する
研究内容	急速に高齢社会に移行しているわが国では、今後高齢者の食生活を健全に営むことが、健康維持には重要な課題である。多くの高齢者が食物の咀嚼や嚥下に問題を抱えているが、食物はその物理的な特性によって、咀嚼や嚥下が異なる。また、摂食者の歯の状態、咬合力などが大きく影響する。そこで、食物の側から見た望ましい特性を食品の種類との関係で明らかにし、調理方法を解明する。すなわち、食物の1口量、とろみや固さの影響などを物理的な手法で測定するとともに、摂食者の食べる意欲を引き出す調理形態について明らかにする。他方、これを高齢者側の条件との関係で、類別化していくことによって、高齢者の条件に合わせた調理方法が明らかにできる。本研究は実際の高齢者施設などとの連携をはかりながら進めることによって、現場への応用も視野に入れた研究となる。
指導教員	明渡陽子教授 研究全体の指導 堀江正一教授 老年期の食生活の安全性全般 市川朝子教授 年齢と健康に関連した食物の形態について
履修科目	病態栄養学特論（2単位）、食生活安全学特論（2単位）、老年学特論（2単位）

人間生活科学専攻（生活素材学専修）	
研究題目	機能性油脂の調理科学的研究
養成する具体的な人材像	将来において研究者として自立して研究活動を行い、高度に専門的な知識と技術を必要とする業務に従事しうる能力を涵養する。
研究内容	ひとは食べ物から栄養素を取り込み、成長・活動し、健康な生活を営む。時代の変遷に伴い、ひとの健康に関わる食べ物に関する問題点も変化してきている。現在においては、日本人のアンバランスな食事の取り方が多方面から問題視されている。その中で三大栄養素の一つである脂質の摂取に関しては、特に中高年の男性にメタボリックシンドロームの割合が高いとされる。各々のひとが適した栄養の量を知り、食事から適切な量を摂取することが常に重要な原則となる。そこで、本研究は三大栄養素の一つである食用油脂に焦点をあてて、幅広い機能的有効利用法が可能となることを目的とする。古代から現在に至るまでに扱われてきた食用油脂類の種類と調製方法・残留物の扱い、調理加工への使用領域について分類する。さらに、近年、開発されたモノアシルグリセリド、ジアシルグリセリドなどを含むさまざまな機能性をもつ油脂類をその機能性から分類し、油脂類が担う調理科学的役割を位置づける。その上で、どのような油脂類にどのような機能性物質を付与することが有効かつ可能であるかを、実際に食品を用いてモデルケースを組んで試作調製し、その製品についての物性面の評価と官能評価両面から検討を行う。
指導教員	市川 朝子教授 研究全体の指導 大森 正司教授 機能性油脂の物性評価について 青江誠一郎教授 栄養学的評価について
履修科目	食品機能学特論（2単位）、栄養素機能学演習（2単位）、調理素材学特論（2単位）

言語文化学専攻（日本文学専修）	
研究題目	『新古今和歌集』における歌語の研究
養成する具体的な人材像	文学の言語を通時的にも理解できる人材を養成する
研究内容	『新古今和歌集』における歌語使用の特質を、それまでの和歌史の展開推移をたどることによって究明してみたい。二十一代に及んだ勅撰和歌集のうち、特に正典化されたのは、『古今和歌集』と『新古今和歌集』であった。一般に古今調・新古今調という名辞で今日も理解されるように、近代にまでその影響は及んでいる。それほどまでに規範化された要因の一つ

	に、雅語となる歌語の使用が挙げられよう。歌語の研究は、日本和歌史の展開を明らかにする重要な領域となっている。『新古今和歌集』は、本歌取りの技法が確立したことで知られるが、その技法を成立させ得た要因の一つに歌語の使用があった。伝統的・様式的な歌語を再生させて新たな意味や印象を付与するとともに、新風となる歌語を創成することで、新古今調が形成されたと言えよう。本研究では、『新古今和歌集』で頻用された歌語を整理検討することによって、本集における伝統と革新のありようを迫り、和歌史の展開に対する理解を深めることとしたい。それは、日本的心性や美意識、あるいは日本語表現の特異性を明らかにすることと関連しよう。
指導教員	柏木 由夫教授 研究全体の指導、歌語研究・和歌史研究の指導 倉田 実教授 古代文学研究の指導 稲葉 二柄教授 中世文学研究の指導
履修科目	古代文学特論Ⅰ（2単位）、古代文学特論Ⅱ（2単位）、中世文学特論Ⅰ（2単位）、中世文学特論Ⅱ（2単位）、研究指導（中世）Ⅰ（2単位）、研究指導（中世）Ⅱ（2単位）

言語文化学専攻（英語文学・英語教育専修）	
研究題目	英語の倒置感嘆文のモダリティ
養成する具体的な人材	言語のしくみと働きを深く理解し、認知に裏打ちされたコミュニケーション過程の原理的理解と実践能力
研究内容	倒置感嘆文は、統語的には yes-no 疑問文と同一の形式をもち、語用論的には〈質問〉と〈感嘆的主張〉の間を揺れ動く表現形式である。倒置感嘆文は基底の〈質問〉のモダリティから表層の〈感嘆的主張〉のモダリティが派生したとみなすのが適切であると考えられる。先行研究では、有標の感嘆文である倒置感嘆文には断片的な観察がなされているに過ぎない。そこで、本研究では、倒置感嘆文がどのような発話プロセスを経て基底のモダリティから表層モダリティを導きだすかを明らかにする。また、倒置感嘆文がプロトタイプ感嘆文とどのような相性と差異を示すかを検討する。さらに、倒置感嘆文と並行的に、修辭疑問文も〈質問〉と〈主〉の二重の発話内行為を表すので、両者の比較を試みる。最後に、英語の倒置感嘆文に見られる〈質問〉から〈感嘆的主張〉への揺らぎは語用論的普遍性をもつと推測されるので、例えば英語と類型を異にする日本語における対応形についても検討する
指導教員	河野 武教授 研究計画、全般的指導、主に語用論に関わる研究指導 村上 丘教授 主に統語論に関わる研究指導 伊東武彦教授 主にコミュニケーション論に関わる研究指導
履修科目	英語学特論Ⅰ（2単位）、英語学特論Ⅱ（2単位）、英語学特殊研究Ⅰ（4単位）、英語学特殊研究Ⅱ（4単位）、研究指導（英語学）Ⅰ（2単位）、研究指導（英語学）Ⅱ（2単位）

## 7. 施設・設備等の整備計画

### (1) 自習室（研究室）について

千代田校地には、現在、家政学研究科、文学研究科の学生が使用している自習室が本館3階、4階（2ヶ所）、7階及び大学校舎3階、5階、7階の7ヶ所に、多摩校地には、社会情報学部棟1階及び人間関係学部棟3階、4階の3ヶ所、合計で10ヶ所に設置されている。

改組後の研究科においても同様に、この10ヶ所を大学院生の自習室として利用することになる。

【自習室の設置状況】（配置図は資料1のとおりである。）

	千代田校地		多摩校地
本館	○3階310室(32.41㎡)： 人間生活科学専攻（修士・博士後期）	社会情報 学部棟	○1階6112室(80.00㎡)： 現代社会研究専攻（修士）

	○ 4階411室(34.33㎡) : 言語文化学専攻国際文化専修(修士)、 現代社会研究専攻(修士) ○ 4階414室(43.54㎡) : 言語文化学専攻日本文学専修(修士) ○ 7階710室(34.52㎡) : 言語文化学専攻英語文学・英語教育専修 (修士・博士後期)	人間関係 学部棟	○ 3階7361室(81.41㎡) : 臨床心理学専攻(修士) ○ 4階7417室(40.58㎡) : 人間生活科学専攻(修士) 言語文化学専攻(修士)
大学 校舎	○ 3階347室(32.10㎡) : 人間生活科学専攻(修士・博士後期) ○ 5階518室(31.90㎡) : 人間生活科学専攻(修士・博士後期) ○ 7階721室(23.50㎡) : 人間生活科学専攻(修士・博士後期)		

以上の10ヶ所合計で座席数161席、パソコン40台、プリンター11台等が設置されており、大学院生は自由に利用できることになっている。

## (2) 実習・研究施設

本学の附属施設として、人間生活文化研究所及び心理相談センター、家政学部の附属施設として児童臨床研究センター、文学部の附属施設として草稿テキスト研究所を設置し、大学院生をサポートしている。

人間生活文化研究所(平成20年4月に人間生活科学研究所から改組変更)は、本学の社会的貢献の一環として、本学が有する諸々の優れた知的資源を活用し、人間の生活文化全般にかかわる諸問題の基礎的研究及びその結果の応用発展について、広く国際的・学際的見地から総合的に研究、調査を行い、これらの成果を広く社会に提供することを目的に、昭和56年に千代田校地に設置され、本学大学院教育の基盤となっている。

心理相談センターは、臨床心理学専攻に在籍する大学院生を対象として、臨床心理士を養成するための教育・訓練の実習施設としての役割を有するとともに来談者に対する心理相談サービスの提供及び調査研究活動を行うことを目的とし、平成15年に多摩校地に設置された施設である。

児童臨床研究センターは、本学家政学部児童学科学学生及び大学院生の実習施設としての役割を有するとともに、児童学における臨床研究の推進とその成果を社会に還元することを目的として、平成4年に千代田校地に設置された施設である。

草稿テキスト研究所は、主として日本文学の草稿・テキスト等に関する基礎的資料を収集し、書誌学的文献閲覧の便宜を教員に提供するとともに、大学院生に文献処理の技法を教授し、実践を支援することを目的として、平成11年に千代田校地に設置された施設である。

この他に研究用の設備としては、既設の家政学研究科が所有している機械・器具と人間生活文化研究所が所有する高度な研究を行うに十分な設備・機械・器具を有している。

## (3) 図書

千代田校地及び多摩校地の総合情報センター内にそれぞれ図書館が設置されており、図書館における蔵書数は以下のとおりである。

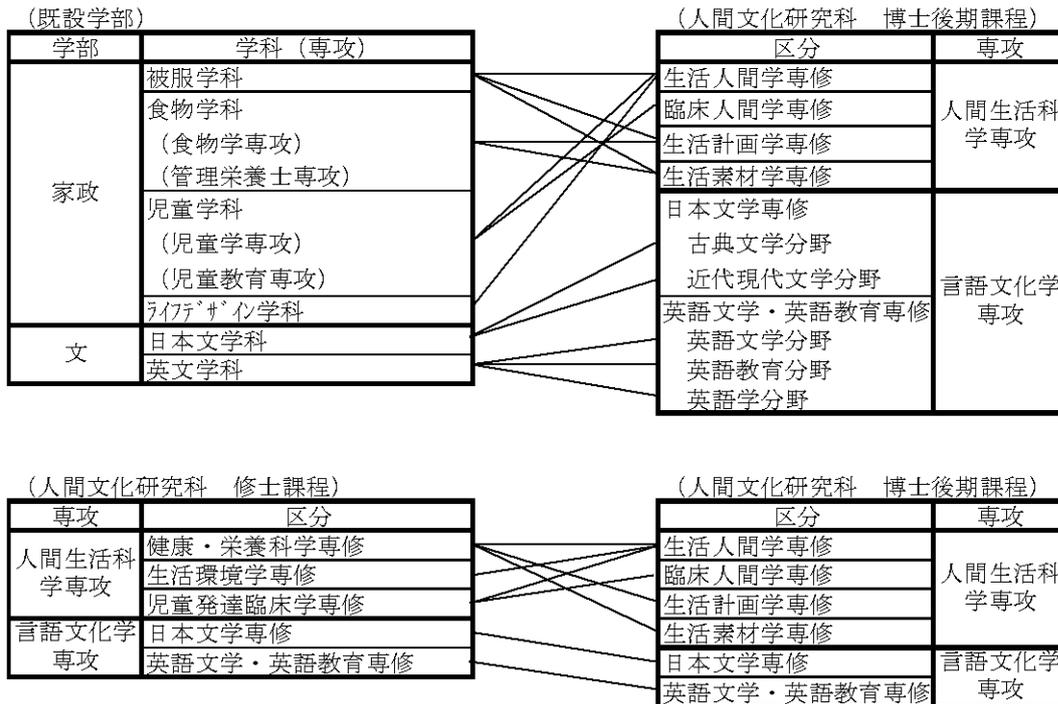
校地	和図書	洋図書	図書合計	和雑誌	洋雑誌	雑誌合計	視聴覚資料
千代田	139,179冊	37,166冊	176,345冊	3,190種	721種	3,911種	1,860点
多摩	91,888冊	25,348冊	117,236冊	1,392種	435種	1,827種	3,826点
合計	231,067冊	62,514冊	293,581冊	4,582種	1,156種	5,738種	5,686点

## 8. 既設の学部（修士課程）との関係

### (1) 修士課程

(既設学部)		(人間文化研究科 修士課程)		
学部	学科（専攻）	区分	専攻	
家政	被服学科	健康・栄養科学専修 〔栄養化学分野 食品・機能学分野 調理科学・食嗜好学分野 医療・保健栄養学分野〕	専門科目	人間生活科学専攻
	食物学科 (食物学専攻) (管理栄養士専攻)			
	児童学科 (児童学専攻) (児童教育専攻)			
	ライフデザイン学科			
文	日本文学科	日本文学専修 〔古典文学分野 近代現代文学分野 日本語学分野 関連分野〕	専門科目	言語文化学専攻
	英文学科			
	コミュニケーション文化学科			
社会情報	社会情報学科 (社会生活情報学専攻) (環境情報学専攻) (情報デザイン学専攻)	英語文学・英語教育専修 〔英語文学分野 英語教育分野 英語学分野〕 国際文化専修 〔地域文化分野 国際分野 関連分野〕		
人間関係	人間関係学科 (社会学専攻) (社会・臨床心理学専攻)	情報コミュニケーション専修 〔基礎理論分野 社会・経済と情報分野〕 臨床社会学専修 〔生と死の臨床分野 ジェンダー臨床分野 現代社会理論・社会調査分野〕	専門科目	現代社会研究専攻
	人間福祉学科 (人間福祉学専攻) (介護福祉学専攻)			
比較文化	比較文化学科	臨床心理学基礎分野 臨床心理学専門分野	専門科目	臨床心理学専攻

(2) 博士後期課程



9. 入学者選抜の概要

(1) アドミッションポリシー

① 修士課程

人間生活科学専攻は、人間生活に関わる様々な企業や研究所、行政機関などの高度な職業能力を必要とする分野において活躍するために不可欠の基礎的な素養と応用的能力を涵養することを目的としている。この専攻は健康・栄養科学、生活環境学、児童発達臨床学の各専修からなる。各専修では複数の専修にまたがる問題についても学際的に探求できる人材を視野に入れており、次のような志望者を望んでいる。

- a 環境・衣・食・住・行動・子育て・心理・健康・などの人間生活に関わる研究を通じて高度な職業能力を身につけたい人。
- b 生活者として生活素材に興味を持ち、それらの研究・開発の専門家を目指す人。
- c 人間の発達と行動のダイナミズムを研究し、その研究成果と得られた専門的能力を職業人として活かしたい人
- d 発育・発達と臨床の視点から、子どもや子どもの文化、子育てについて理解を深め、障害を支援することに携わりたい人
- e 職業に就きながら、生活科学に関する実践的な研究を通じて、高度な職業人としての能力を高めたい人

言語文化学専攻は、言語と文学として結実する人間のあり様に、さらに文化的な視点をまじえた複層的な事象を研究の対象としている。具体的な対象や領域は、自然発生的で単純にみえるものから技巧が加えられた精緻なもの、静的なものから動的なものまでさまざまである。なにがときほぐされ明らかになるか、それはどのような問いを發するかによる。問い方、そして答えをまとめる技法を身につけることで、成果を世に問うことができる。そして成果だけでなく、問い方、答えのまとめ方も社会の共有財産となる。みずみずしい感性を持ち、ことばと文化を深く研究する中で自己を形成し、広く社会に貢献していこうとする以下のような強い意志の持ち主を望んでいる。

- a 日本文学や日本語を深く研究したい人
- b 日本文学や日本語の深い理解力を身につけたい人

- c 日本語の実践力を高めたい人
- d 日本の歴史や文化を文学から考え直したい人
- e 知的で洗練された英語が読める英語のエキスパートを目指す人
- f 言語学的な観点から英語のしくみと働きを知り、高度な英語のコミュニケーションに役立てたいと思っている人
- g 文学作品の専門的研究を通して人間や社会、文化のあり方について理解を深めたいと考えている人
- h 欧米だけでなく、中国、韓国、ロシアの文化にあらためて高いレベルで取り組みたい人
- i 実務的能力を発揮して、流動的な文化交流に貢献したい人

現代社会研究専攻は、現代社会そのものを動かしていく重要な要因となる情報通信技術が引き起こす多様な現象を主たる研究対象とする情報コミュニケーション専修と、現代の深刻な社会問題の背景に潜在しているジェンダーとエイジングに関わる問題を対象とする臨床社会学専修から構成されているため、次のような人を望んでいる。

- a 現代社会の動態に関して、社会科学の観点から考えようとする意欲を持っている人
- b 現代の情報通信技術のあり方について、根本的に再検討しようという意欲を持っている人
- c 現代社会におけるジェンダー問題が引き起こす社会現象に関心を持っている人
- d 現代の人々の生と死の問題が引き起こす社会現象に関心を持っている人
- f 大学院での専門的な学習成果を現実社会の中で活用したいという意欲を持っている人
- g 実際に、現代社会の中で活用している自己の職業能力を今以上に向上させたい人

臨床心理学専攻は、臨床心理学的なアセスメント、心理面接、地域援助の理論と技法を修得し、さらに科学的思考と臨床的な態度とを身につけ、医療・教育・産業・福祉・司法などさまざまな領域で、適切な援助、介入及び研究のできる臨床心理の専門家を養成するため、次のような人を望んでいる。

- a 基礎的な心理学の知識を備え、論理的思考のできる人
- b 共感的理解のできる人
- c 成熟した社会的スキルを備えた人

## ②博士後期課程

人間生活科学専攻は、生活の主体である人間と生活に関するさまざまな分野を対象として、研究者として自立した研究活動を行うのに必要な高度の能力及びその基礎となる豊かな学識を養うことを目的としている。人間生活科学専攻には、生活人間、臨床人間、生活計画、生活素材の領域があり、それぞれの領域または、複数の領域にまたがる問題について生活する人間という立場から総合的な研究も行うため、次のような人を望んでいる。

- a 自立した研究者としての必要な基礎学力と研究に対する熱意を有する人
- b 自己の研究と社会の関係に深い関心を持つ人、すなわち、人間の生態、環境、行動、心理などについて研究する人
- c 修士課程を修了し、あるいはこれと同等の学力を有する人で、本学の人間生活科学の各領域に深い関心を持ち、研究意欲をもつ人
- d 職業に就きながら、上記 a・b に関連した研究を行い、自己の能力を高めていきたい人

言語文化学専攻修了者は、文学と言語を中心とした専門性・言語文化や言語教育に対する知見・国際的視野に立つ多文化理解力などを保持した人材が社会から求められているため、学校教育現場のみならず、社会教育にかかわる諸機関、出版・放送などのメディア関係での活躍が期待できる。そのような人材を養成するために、次のような人を望んでいる。

- a 日本文学や日本語を専門的に研究したい人
- b 日本の文化や歴史を文学から専門的に研究したい人
- c 日本文学や日本語に対する深い専門性をもって国際的に活躍したい人
- e 英語を言語学的観点から科学的・体系的に研究したい人
- f 英語文学作品やその他の様々なテキストを文化的・社会的文脈の中で読み解く能力をもち、文体的感性を高めたい人
- g 言語学や文学の素養を生かし、英語教育を多角的に研究したい人

## (2) 選抜方法

### ①修士課程

専門科目や小論文、外国語、口述試験により選考を実施し、それらの選考の結果及び提出書類（出身大学からの成績証明書、卒業論文の要旨、希望研究課題等）を総合して可否の判定を行う。

なお、人間生活科学専攻及び現代社会研究専攻は、研究機関、教育・保育等の機関または企業等において2年以上の職業経験がある者を対象とした社会人特別選抜を実施する。試験は、小論文による筆記試験と口述試験により実施し、口述試験、小論文、提出書類（成績証明書、職業経歴書、希望研究課題等）を総合して判定を行う。

また、この社会人特別選抜による入学手続完了者については、希望があれば教育に支障のない範囲で若干名を科目等履修生として受け入れる。

## ②博士後期課程

専門科目や外国語の筆記試験と提出論文（修士論文、成績証明書等）及び希望研究課題を中心とする口述試験により選考を実施し、それらを総合して可否の判定を行う。

## (3)選抜体制

募集方針や入試制度、入学者選抜実施体制の基本的方針については研究会委員会で審議する。可否の判定については、当該専攻において判定案を検討し、研究科委員会で可否の判定を行う。

## 10. 大学院設置基準第14条による教育方法の実施

人間生活科学専攻修士課程及び現代社会研究専攻修士課程では、社会人特別選抜により入学した有職者に対しては、大学院設置基準第14条に定める教育方法の特例を適用する。

入学の際に提出を求める研究計画を基に、勤務形態に配慮した教育研究体制を採る。個々の事情に応じて、月曜日から金曜日までの第6時限（18時00分～19時30分）及び土曜日（9時00分～17時50分）に授業科目を適宜開講するなど弾力的に対応する。また、電子メールなどを利用し、指導教員に直接アクセスすることにより、迅速かつ有効な研究指導を積極的に行うなどの措置を講じ、教育効果の向上を図る。

なお、修業年限は、長期履修学生制度の適用を希望する場合は、3年または4年とすることができる。

また、この社会人特別選抜による入学手続完了者については、当該専攻の指定した入学前の後期開講授業科目について、科目等履修生として履修を希望する際、科目等履修生の選考料、入学科及び履修料を免除する。この科目等履修生として修得した単位は、入学前の既修得単位として10単位を超えない範囲で、入学後の本学大学院における授業科目の履修により、修得したものとみなすことができる。

この社会人特別選抜は、募集人員を若干名とし、小論文による筆記試験と口述試験により実施し、口述試験、小論文、成績証明書等を総合して判定を行う。

また、図書館の利用、情報処理施設等の利用及び事務窓口の対応については、個々の学生の状況に応じて個別に対応するよう体制を整えている。

## 11. 千代田校地及び多摩校地での教育

既設の家政学研究科及び文学研究科は千代田校地で、社会情報研究科及び人間関係学研究科は多摩校地でそれぞれ教育を行っていたが、改組後の人間文化研究科は、千代田校地（東京都千代田区三番町12番地）及び多摩校地（東京都多摩市唐木田2丁目7番地1）で教育を行うことになる。

学生の研究室（自習室）は、千代田校地に7カ所、多摩校地に3カ所設置、図書館及び情報処理関係機器はそれぞれの校地に配置されており、学生の利用には支障ないように配慮されている。

また、千代田校地と多摩校地間の移動時間は60分程度であり、教員及び学生の移動にはそれほど時間はかからないが、千代田校地、多摩校地それぞれで開講する授業科目の開講曜日・時限、研究指導日を特定し、重複しないようにする等、授業時間割編成の際に配慮する。

なお、会議等で必要な場合は、テレビ会議システムにより、両校地間を結ぶことも可能となっている。

## (1)修士課程

人間生活科学専攻及び言語文化専攻の主たる教育は、千代田校地となるが一部の授業科目は多摩校地で、現代社会研究専攻の主たる教育は、多摩校地となるが一部の授業科目は千代田校地で教育を行う。また、臨床心理学専攻はすべて多摩校地で教育を行う。

各校地の専任教員の配置状況は以下のとおりである。

専攻名	千代田校地の専任教員数				多摩校地の専任教員数			
	教授	准教授	講師	助教	教授	准教授	講師	助教
人間生活科学	21名	10名	0名	0名	7名	0名	1名	0名
言語文化学	22	1	2	2	8	2	0	0
現代社会研究	2	0	0	0	20	5	1	0
臨床心理学	0	0	0	0	4	3	0	1

## (2) 博士後期課程

博士後期課程は、千代田校地専任の教員が、すべて千代田校地で教育を行う。

## 12. 管理運営

大妻女子大学大学院学則第6章で、運営組織に関することが定められており、大学院に研究科委員会を置くことになっている。

研究科委員会は、研究科長並びに研究科に属する教授、准教授、助教及び専任講師をもって組織している。

研究科委員会の審議事項は以下のとおりである。

- (1) 研究科長の選考に関する事項
- (2) 本学大学院教員の選考に関する事項
- (3) 学則及び諸規則に関する事項
- (4) 教育課程に関する事項
- (5) 学生の入学、休学、復学、退学、除籍、再入学及び転学に関する事項
- (6) 課程修了の認定に関する事項
- (7) 学位の授与及び取消に関する事項
- (8) 学生の厚生補導及び賞罰に関する事項
- (9) その他研究科の運営に必要な事項

なお、研究科委員会は、研究科委員会に属する教員のうちの一部の者（研究科長、各専攻主任、修士課程・博士後期課程各専攻から選ばれた教授又は准教授若干名）をもって構成する代議員会を置き、研究科委員会は、代議員会の議決をもって、研究科委員会の議決とすることができるとしている。

代議員会の審議事項は以下のとおりである。

- (1) 本学大学院教員の選考に関する事項（博士後期課程の担当教員の選考を除く）
- (2) 学則及び諸規則に関する事項
- (3) 教育課程に関する事項
- (4) 学生の入学、休学、復学、退学、除籍、再入学及び転学に関する事項
- (5) 課程修了の認定に関する事項（博士後期課程の修了の認定を除く）
- (6) 学位の授与及び取消に関する事項（博士の学位の授与及び取り消しを除く）
- (7) 学生の厚生補導及び賞罰に関する事項
- (8) その他研究科の運営に必要な事項

研究科委員会又は代議員会は、原則として毎月1回（8月・9月を除く）、年間10回を定例会とし、必要に応じて臨時の研究科委員会又は代議員会を開催する。

## 13. 自己点検・評価

本学における教育研究活動の状況並びに組織、施設の運営及び財務状況について、自己点検・評価を行い、教育研究水準の向上を図ることを目的として、大妻女子大学大学院学則第1条の2の規定に基づき、大妻女子大学自己点検・評価委員会が設置されている。

平成6年度、平成12年度に自己点検・自己評価報告書「大妻女子大学の現状と課題」を公表するとともに、平成19年6月には大学機関別認証評価を受けるため、独立行政法人大学評価・学位授与機構が定める評価基準項目に関して自己評価書を作成し、同年11月に訪問調査を受け、平成20年3月に大学評価・学位授与機構から、大学評価基準を満たしているとの判定を受けた。

なお、自己評価書及び認証評価結果は、本学のホームページで公表している。

## 14. 情報の提供

大学院に関する情報としては、大学院要覧及び講義要綱を作成し、受験希望者、学内教職員及び在学生に配布するとともに、本学ホームページにおいても広く社会に情報を公開している。

大学院要覧に掲載している主な内容は、以下のとおりである。

- (1) 大学院の目的、沿革、構成と学生定員
- (2) 修業年限、学位の授与
- (3) 研究科の目的、履修指導及び研究指導
- (4) 各専攻の目標、授業科目、単位数及び担当教員、指導教員及び研究分野
- (5) 履修方法
- (6) 試験及び成績評価
- (7) 学位論文
- (8) 資格、奨学金制度
- (9) 博士の学位授与状況
- (10) 学則等の諸規程
- (11) 大学院学年歴
- (12) 博士論文審査等に関する日程、修士論文審査等に関する日程

講義要綱には、授業科目ごとの授業（研究指導）の目的・方法、授業（研究指導）の計画、評価の方法及び基準、教科書・参考書、その他（注意事項等）の項目が掲載されている。

また、大学の基本的な情報に関しても、平成20年3月に独立行政法人大学評価・学位授与機構から、大学評価基準を満たしているとの判定を受けた際の自己評価書及び認証評価結果を、本学のホームページで公表している。

なお、教員の研究成果に関しては、大妻女子大学紀要及び心理相談センター紀要を作成し、関係大学等の教育機関にも送付している。

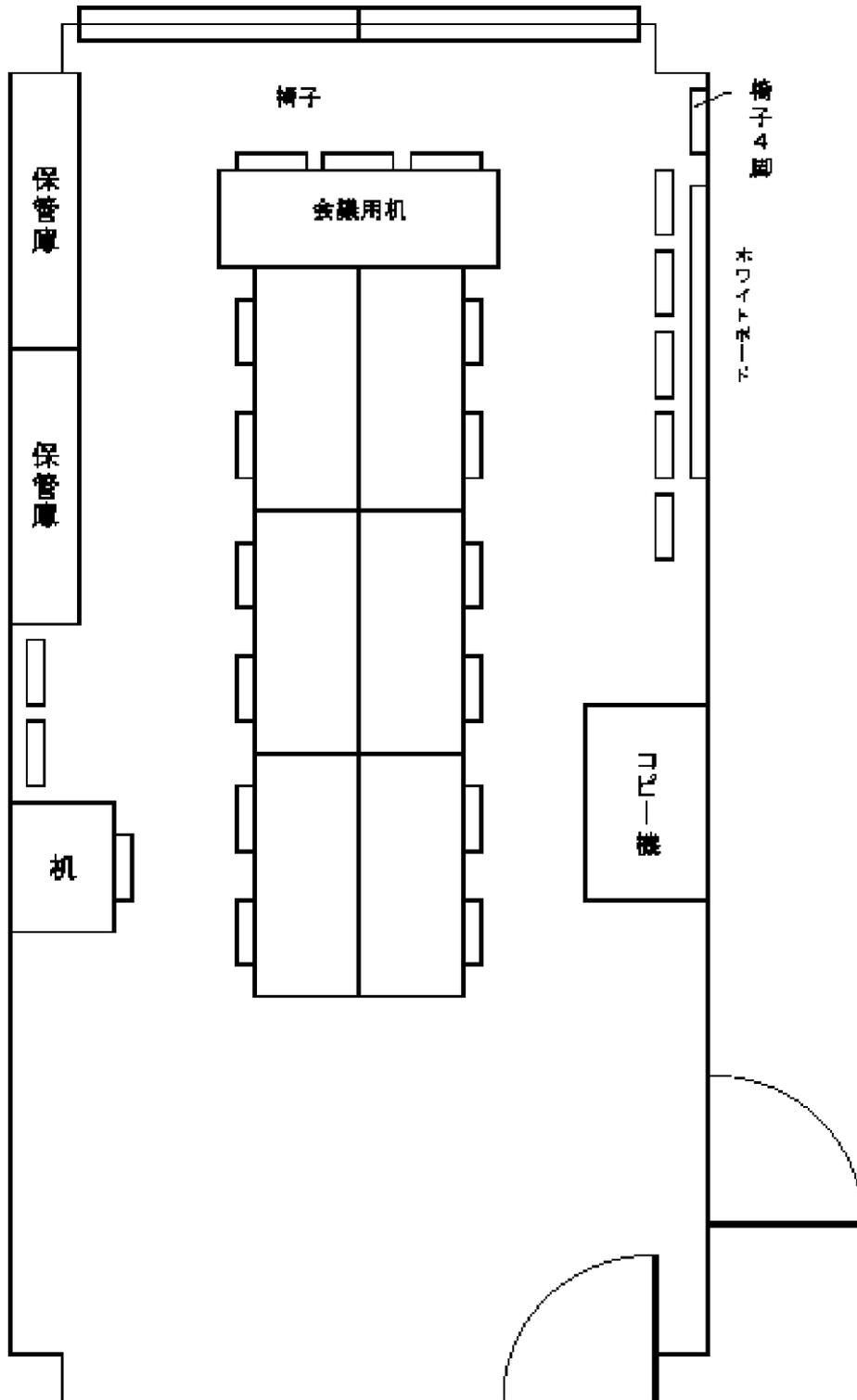
今後も、設置届書、履行状況報告書等設置認可に関する情報の提供も行っていく。

## 15. 教員の資質の維持向上の方策

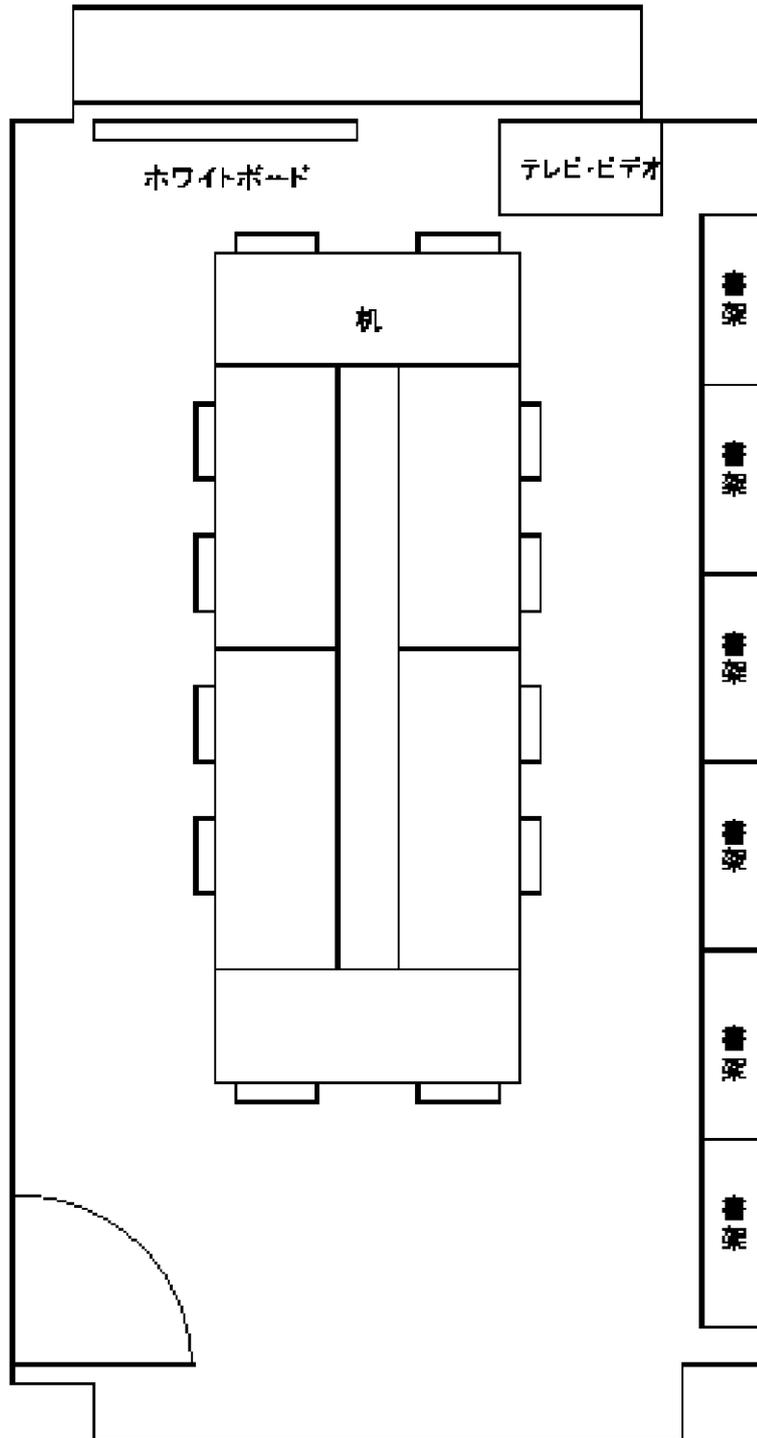
大学全体として、FD委員会を設置し、学生による授業評価の実施との担当教員へのフィードバック、外部講師による教員を対象とした授業方法の改善等に関する研修会の実施、授業公開、模擬授業等を実施し、教員の資質の維持向上に努めている。

また、教員の資質を維持し向上させるために、長期間の国内外研修制度も制定している。

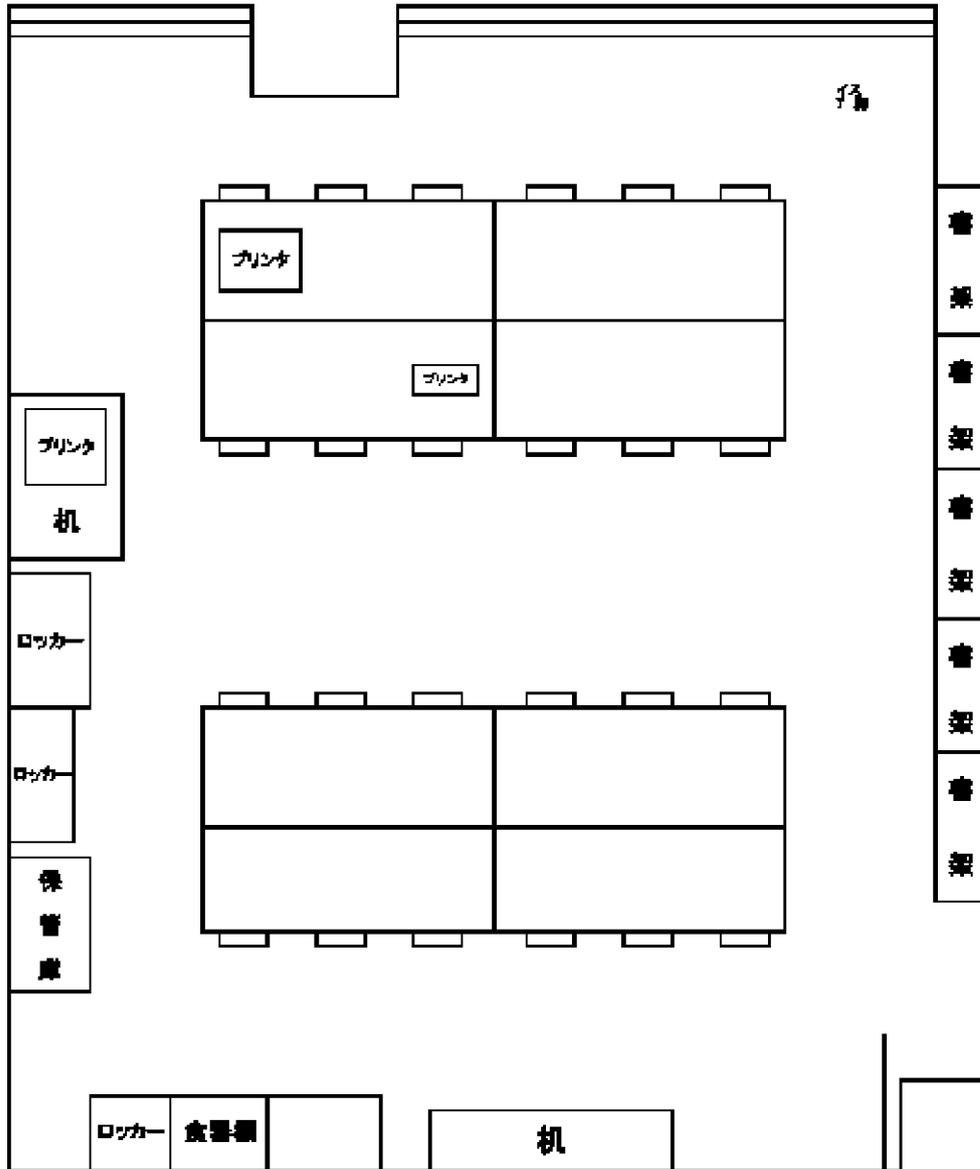
# 本館310



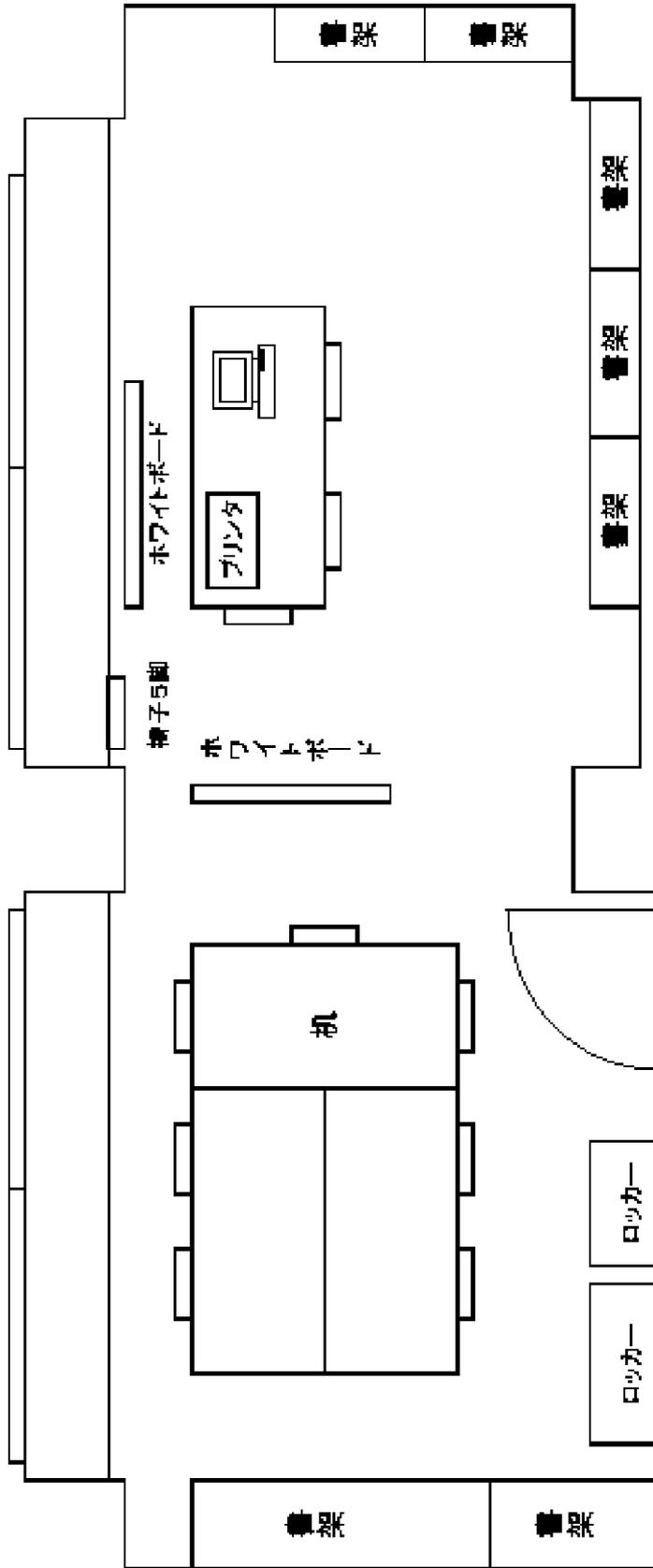
本館411



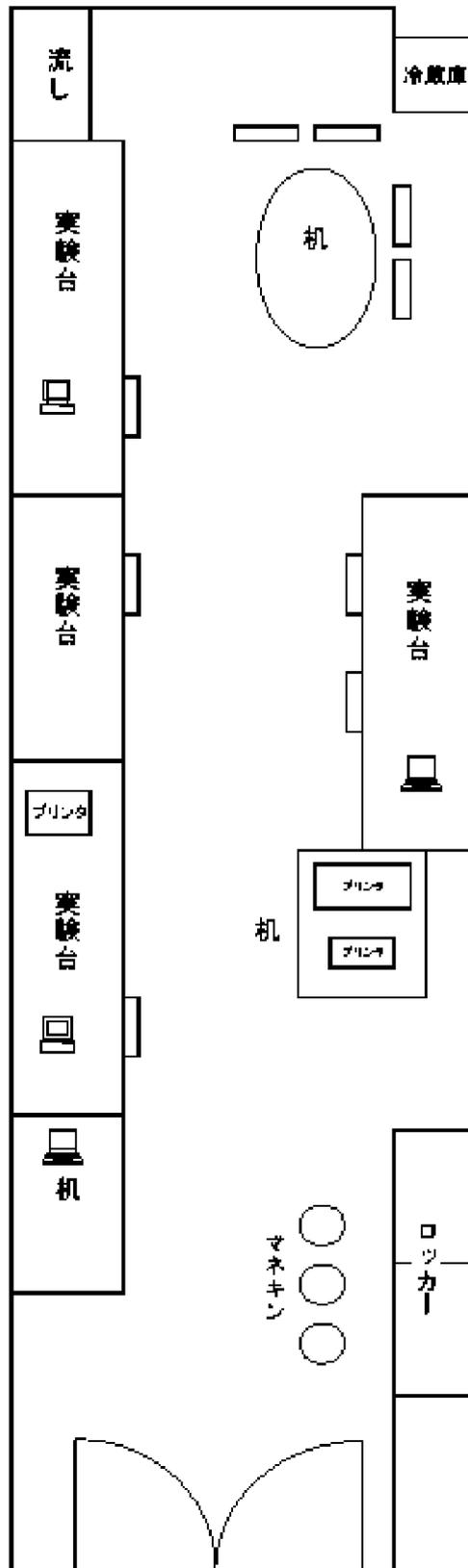
本館414



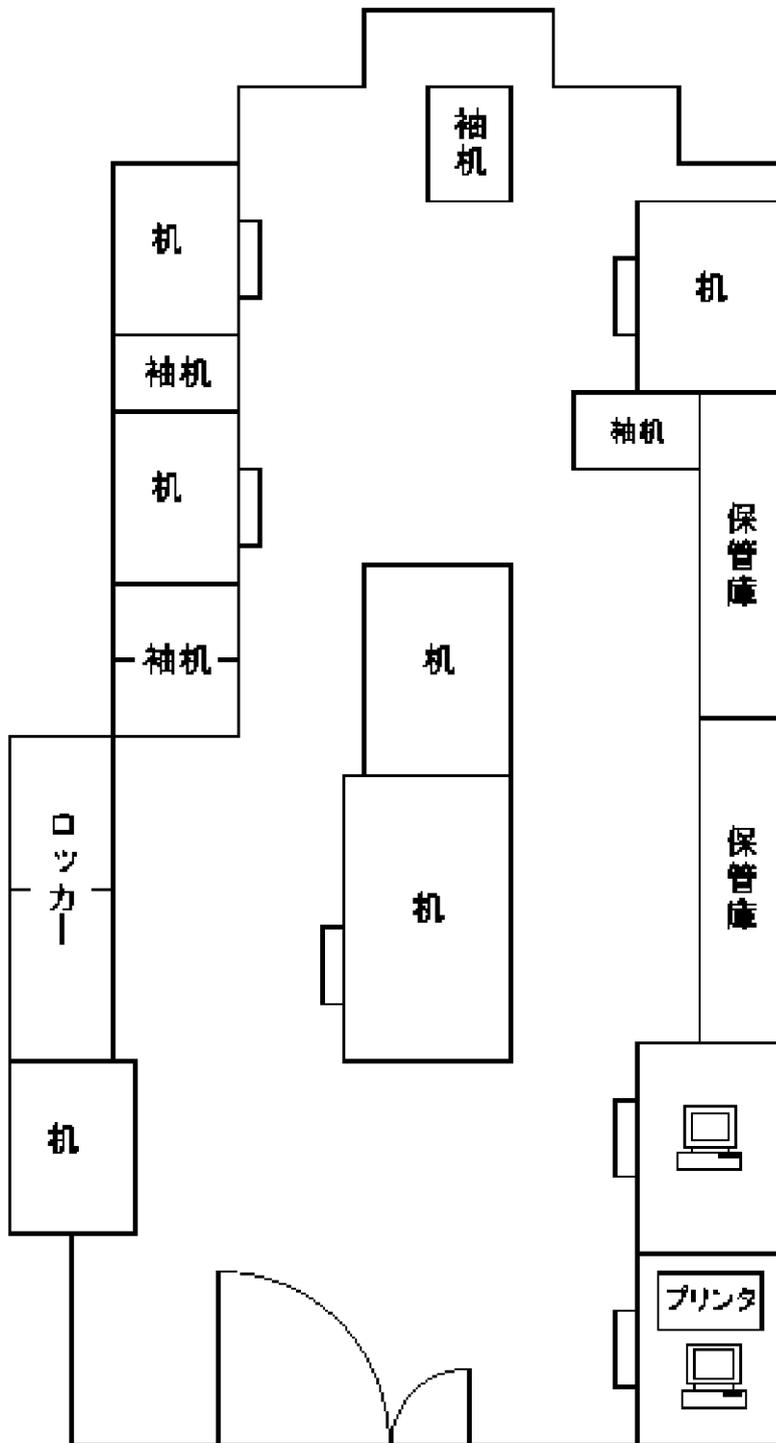
本館710



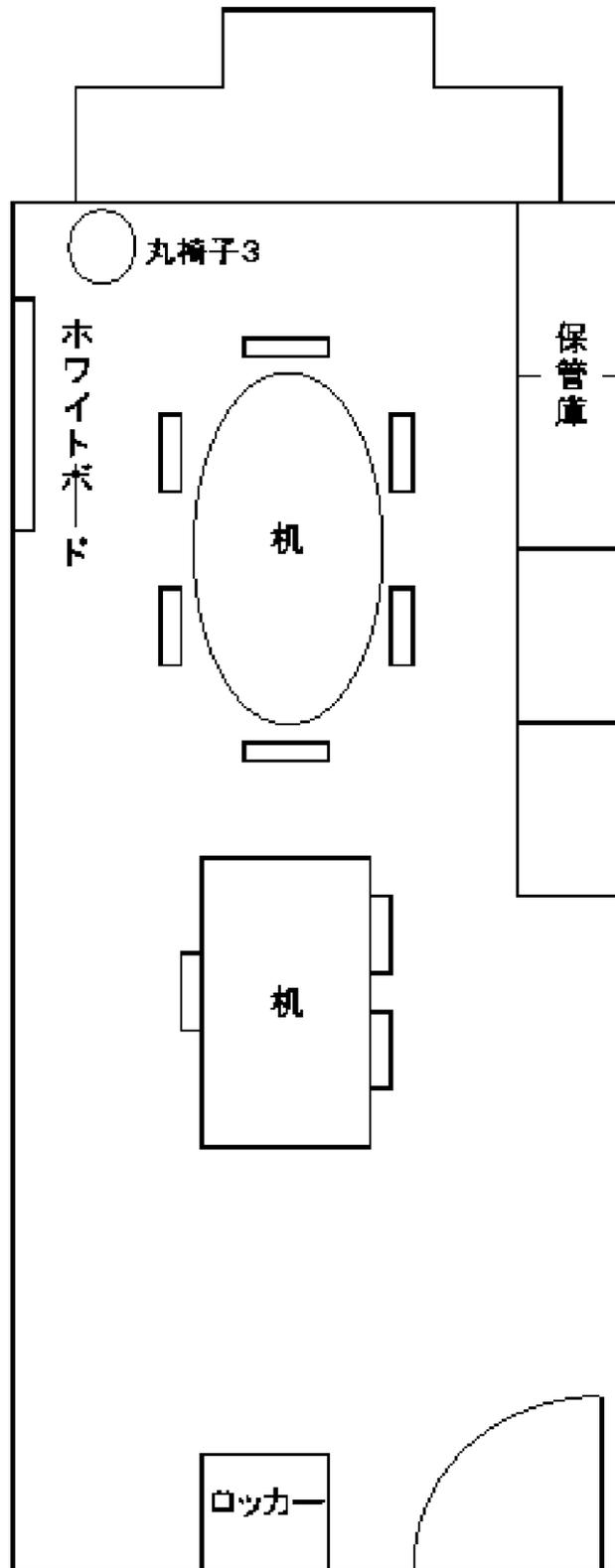
B棟347



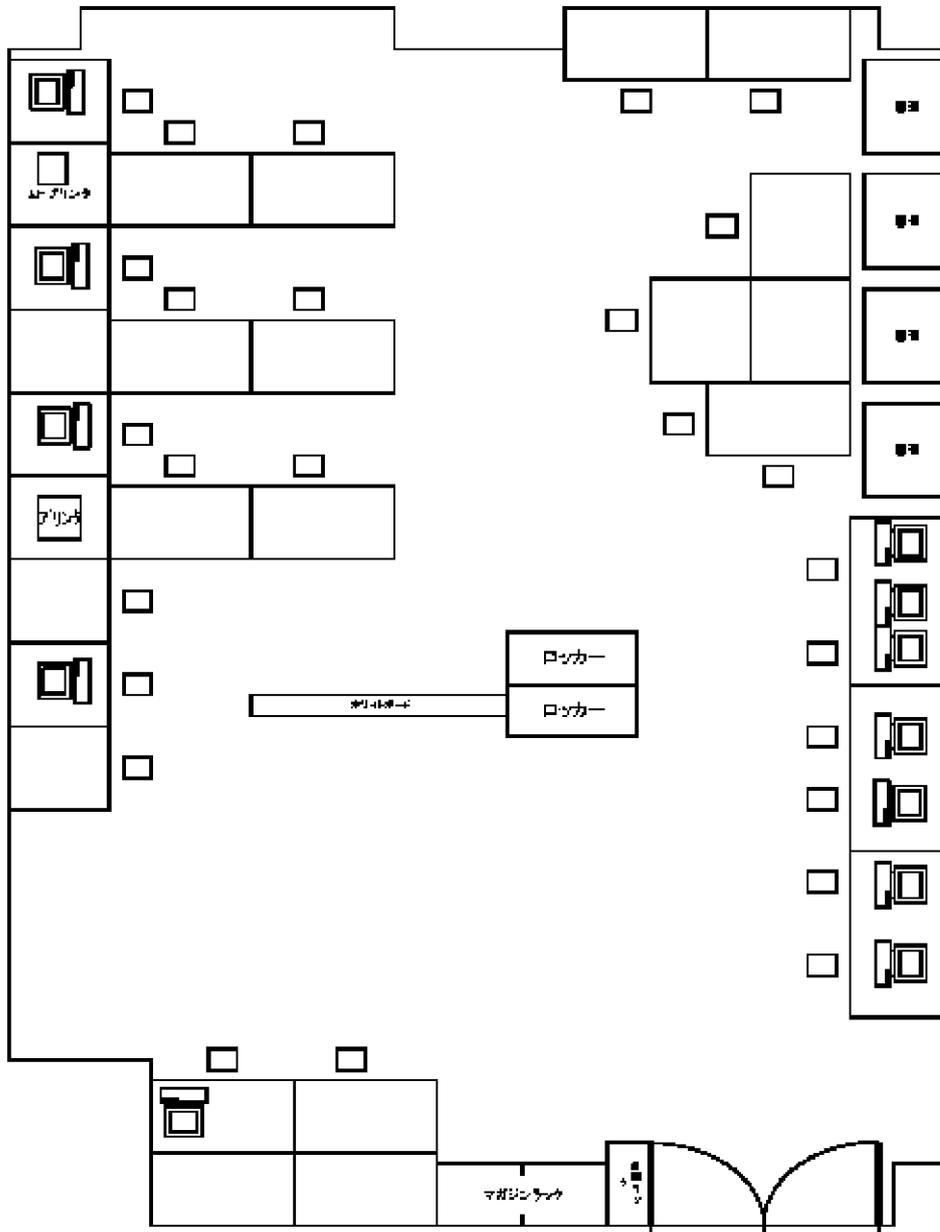
D棟518



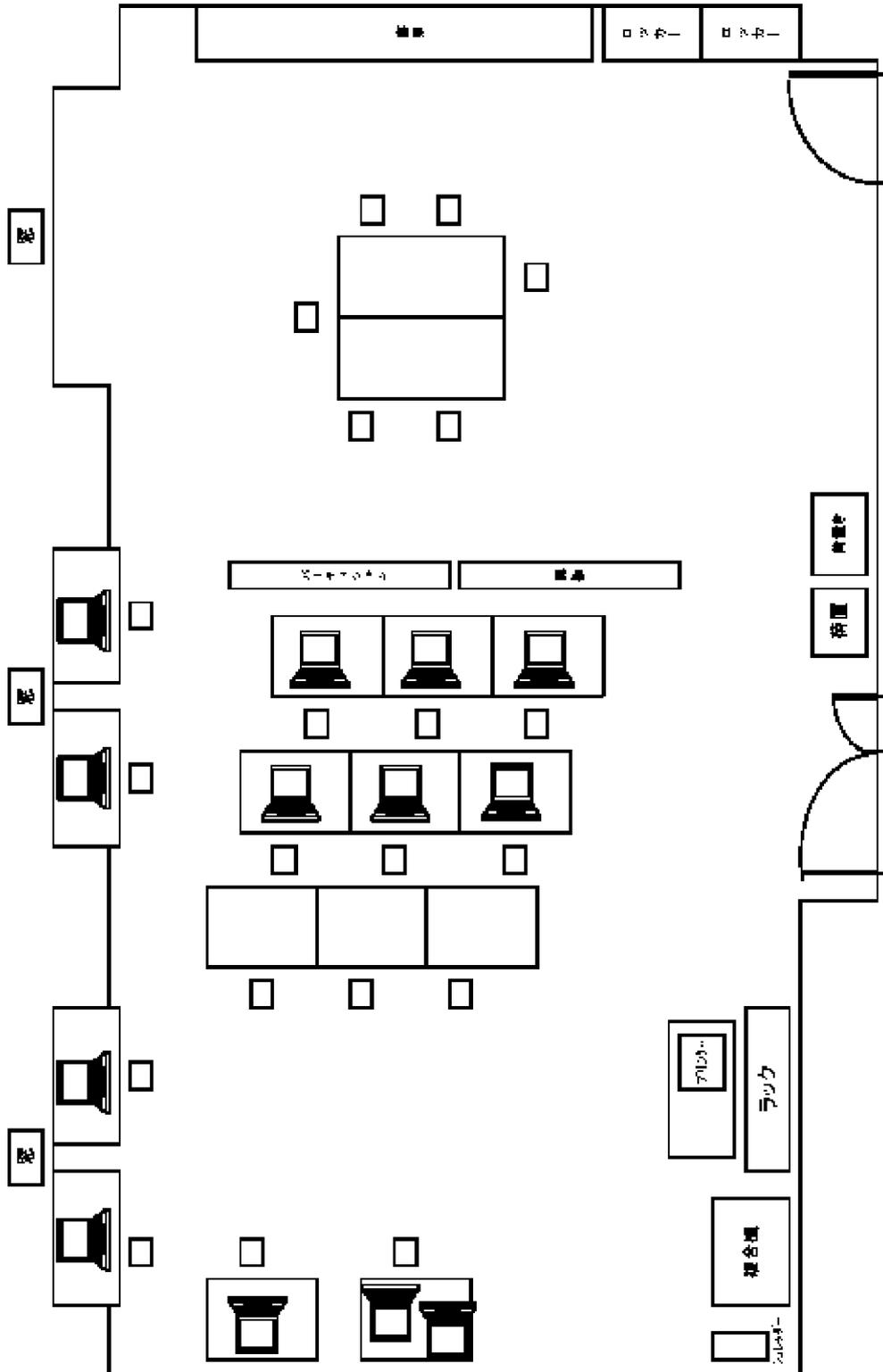
D棟721



# 社情棟6112



# 人間棟7361



# 人間棟7417

